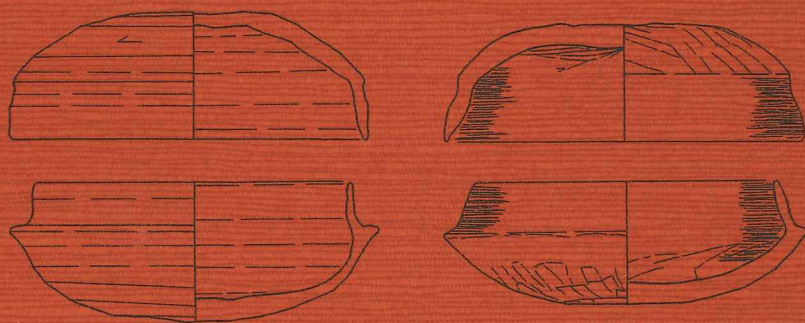


北野遺跡・宮前遺跡

静岡県磐田郡浅羽町
北野遺跡・宮前遺跡発掘調査報告書

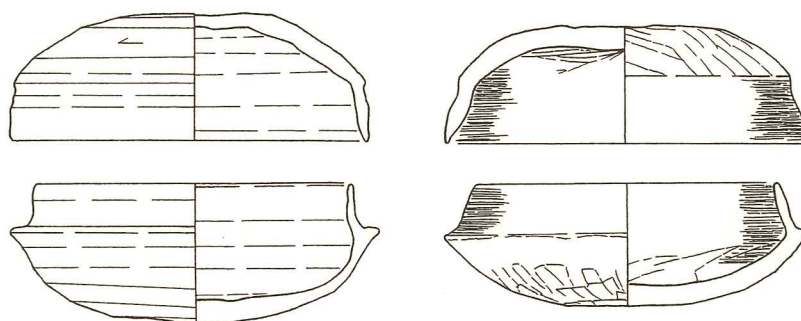


2000

浅羽町教育委員会

北野遺跡・宮前遺跡

静岡県磐田郡浅羽町
北野遺跡・宮前遺跡発掘調査報告書



2000

浅羽町教育委員会



北野遺跡大溝 1 出土土器（抜粋／楠華堂撮影）



1. 北野遺跡 大溝 1 土層断面



2. 北野遺跡完掘状況 (南から)

例 言

- 1 本書は静岡県磐田郡浅羽町梅山に所在する、北野遺跡・宮前遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査は県営地方特定農道「袋井南部地区」（ふるさと農道）設置工事に伴う事前調査として、中遠農林事務所の委託を受け、浅羽町教育委員会が調査主体となって実施した。
- 3 調査は試掘確認調査を1995年度に、工事立ち会いに伴う緊急調査及び試掘確認調査の追加分を1996年度に、北野遺跡の発掘調査を1997年度に実施した。
- 4 調査期間は確認調査が1995年11月16～20日、工事立ち会いに伴う緊急調査が1996年12月16～25日、試掘確認調査の追加分が1997年3月3～5日、北野遺跡の発掘調査が1997年4月21～6月30日、その後の資料整理が1998年4月21日～1999年3月15日、報告書作成が1999年9月13日～2000年3月15日である。
- 5 1997年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 廣岡秀雄
調査担当者 浅羽町教育委員会社会教育課 主査 山本義孝、嘱託員 木曾昌司
事務局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 村松修、係長 鈴木保裕、主査 山本義孝
(文化財担当)
調査作業員 荒井友彦、安間好美、石川信夫、大石勝、大隅好雄、岡本春子、加藤みよ、
金原藤江茂、澤田しな子、鈴木仁美、武田光子、戸塚寛、増田芳子、安井力
- 6 1999年度の報告書作成業務の体制は次のとおりである。

主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 廣岡秀雄
担当者 浅羽町教育委員会社会教育課 主任 山本義孝、嘱託員 木曾昌司
事務局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 松川幸雄、係長 鈴木利征、主任 山本義孝、
(文化財担当)
整理作業員 加藤順子、加藤みよ、鈴木仁美、鈴木涼子、水野由美子
- 7 本書の執筆、編集は山本が行ったが、第三章三節遺物の土器、その他は木曾昌司が執筆した。
- 8 基準杭設定、空撮、報告書に使用した出土遺物の実測（N0,146を除く）は（株）フジヤマに委託して実施した。
- 9 出土遺物のうち、動物遺体（骨、歯）の鑑定は（株）パレオ・ラボに委託し、国立歴史民俗博物館教授西本豊弘氏の指導を得て実施した。
- 10 出土遺物のうち、貝の鑑定は静岡大学名誉教授加藤芳朗氏の指導を頂いた。
- 11 巻頭図版1は楠華堂が撮影した。図版28は浅羽町史編纂室加藤節夫氏が撮影した。
- 12 本書に用いた水準は海拔、方位は座標北である。
- 13 本書に用いた土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』に基づいた。
- 14 調査によって出土した遺物、調査に関わる諸記録は浅羽町教育委員会が保管している。
- 15 報告書の作成にあたり、以下の諸氏の助言および協力を得た。
川江秀孝、柴田稔、柴田睦、鈴木敏則、中嶋郁夫、永井義博、松井一明、山田成洋

北野遺跡・宮前遺跡

目 次

巻頭図版 例 言

第1章 調査経過と環境

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過と方法	2
3 環 境	2
4 歴史的環境	3

第2章 確認調査の概要

1 宮前遺跡・北野遺跡の調査概要	8
2 調査の成果	8

第3章 北野遺跡の調査

1 調査の概要	10
2 遺 構	11
3 遺 物	17
4 総 括	34

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 北野遺跡大溝1出土土器（抜粋／楠華堂撮影）
- 2 1. 北野遺跡 大溝1土層断面 2. 北野遺跡 完掘状況（南から）

図 版

- 1 北野遺跡完掘状況
- 2 1. 大溝1半載状況（西側より） 2. 大溝1内 貝殻出土状況
- 3 1. 大溝1内トレンチ遺物出土状況 2. 大溝1Ⅲ層南岸遺物集中箇所の状況
- 4 1. 住居跡1・2（発見状況） 2. 住居跡1・2（完掘状況）
- 5 1. 方形周溝遺構（発見状況） 2. 方形周溝遺構（完掘状況）
- 6 1. 焼土坑（発見状況） 2. 焼土坑（発掘状況）
- 7 1. 大溝2トレンチ断面 2. 北野遺跡内 浅羽大囲堤基底部
- 8 1. 方形周溝遺構東北コーナー溝断面 2. 土坑1半載状況
3. 土坑2半載状況 4. 土坑3半載状況（手前は住居跡の周溝）
5. 柱穴4半載状況 6. 柱穴3半載状況（右側は住居跡の周溝）
7. 柱穴1半載状況 8. 柱穴2半載状況
- 9 1. 柱穴5半載状況 2. 柱穴6半載状況
3. 柱穴12半載状況 4. 柱穴13半載状況

5. 柱穴14半載状況	6. 柱穴15半載状況
7. 柱穴16半載状況	8. 柱穴17半載状況
10 1. 宮前遺跡 溝状遺構遺物出土状況	2. 宮前遺跡 浅羽大囲堤基底部土層断面
11 北野遺跡出土遺物 1	12 北野遺跡出土遺物 2
13 北野遺跡出土遺物 3	14 北野遺跡出土遺物 4
15 北野遺跡出土遺物 5	16 北野遺跡出土遺物 6
17 北野遺跡出土遺物 7	18 北野遺跡出土遺物 8
19 北野遺跡出土遺物 9	20 北野遺跡出土遺物10
21 北野遺跡出土遺物11	22 北野遺跡出土遺物12
23 北野遺跡出土遺物13	24 北野遺跡出土遺物14
25 北野遺跡出土遺物15	26 北野遺跡出土遺物16
27 北野遺跡出土遺物17	28 北野遺跡出土遺物18

挿 図 目 次

図 1	北野遺跡の位置	1
図 2	浅羽低地を中心とした地形概念図	4
図 3	浅羽低地を中心とした弥生・古墳時代の主要遺跡	5
図 4	北野遺跡・宮前遺跡調査位置図	7
図 5	宮前遺跡・北野遺跡柱状図	8
図 6	宮前遺跡 浅羽大囲堤基底部土層断面（上）、溝状遺構遺物出土図（下）	9
図 7	北野遺跡遺構配置図	10
図 8	北野遺跡遺構図	11
図 9	住居跡 1・2 実測図	12
図10	方形周溝遺構実測図	13
図11	土坑集成図	14
図12	大溝 1 実測図	15
図13	大溝 2 土層断面図（トレンチ部分）	16
図14	北野遺跡出土遺物 1	23
図15	北野遺跡出土遺物 2	24
図16	北野遺跡出土遺物 3	25
図17	北野遺跡出土遺物 4	26
図18	北野遺跡出土遺物 5	27
図19	北野遺跡出土遺物 6	28
図20	北野遺跡出土遺物 7	29
図21	北野遺跡出土遺物 8	30
図22	北野遺跡出土遺物 9	31
図23	北野遺跡出土遺物10	32
図24	北野遺跡出土遺物11	33
図25	北野遺跡出土遺物12	34

第1章 調査経過と環境

1 調査に至る経緯

1995年10月、中遠農林事務所防災課より県営地方農道袋井南部地区、通称「ふるさと農道」の計画地に埋蔵文化財が所在するかどうかの照会が社会教育課に対して行われた。

この計画に対して文化財担当者は計画地点に隣接する場所には周知の埋蔵文化財である宮前遺跡が所在し、遺跡の一部が計画地に及んでいる可能性があるため、範囲を確定する試掘確認調査が必要であると判断した。

これを受けて10月31日に浅羽町民会館において静岡県教育委員会文化課立ち会いのもと、中遠農林事務所防災課、浅羽町建設課、社会教育課の四者で今後の進め方についての協議を持ち、試掘確認調査を浅羽町教育委員会が行い、95年度中に終了して今後の本格的調査が必要となるのかどうかの結論を下すこと、町内在住の地権者への交渉は建設課が行い、その他の地権者も含めて中遠農林事務所が総括することを確認した。

試掘確認調査は11月16日～20日の実質5日間にわたって行い、南北200m、東西110mの範囲で7カ所にトレンチを設定した。この結果、最北端の1トレンチで河川、及び溝状の遺構が確認され、最も南端の5トレンチで断面に小型の掘立柱建物の柱穴一基が観察された。

これによって道路新設部分の南端（後の北野遺跡調査地点）については全面的な発掘調査を必要とし、他の部分に関しては重機による表土剥ぎに立ち会い、遺構が確認された場合に部分的な調査を行うこととして調査計画・資金計画書を作成することになった。

工事は1996年に交差点を中心とする部分と歩道部分が先行し、これに伴う表土剥ぎが12月に行われた。教育委員会はこの作業に立ち会い、宮前遺跡内において土器集中箇所1、浅羽大囲堤の基底部を確認し、12月16日～25日にわたって緊急調査を行った。

その後、発掘調査の範囲を確定するための補足の確認調査を97年3月3日～5日にわたって行い、調査範囲を確定した。97年度に入り、早急に調査の着手を行うために97年4月18日付けで中遠農林事務所との間に業務委託契約書を締結し、21日から6月30日にわたる発掘調査が始まった。

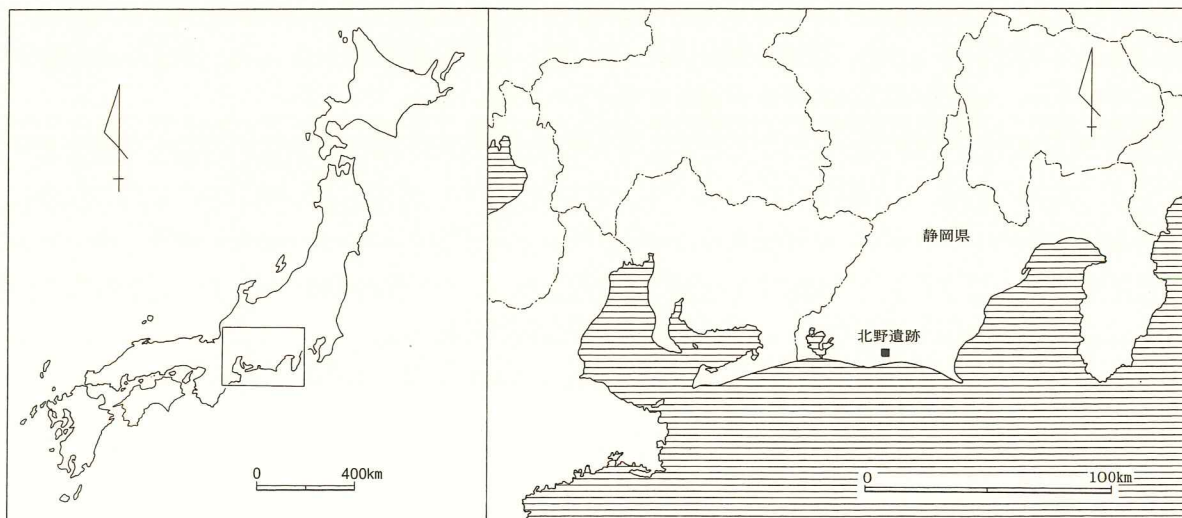


図1 北野遺跡の位置

2 調査の経過と方法

試掘確認調査 試掘確認調査は1995年11月16日に開始した。北側のトレンチから順にバックホーで削り、土層を確認しながら少しずつ掘削を繰り返すという方法を用いた。調査では土層断面の観察を目的とし、遺物包含層の有無の確認、及び断面に掛かる遺構の識別に重点を置いた。遺構が確認されない場合も、沖積低地の地形変化を検討する資料とするために最終的に土層の柱状図が作成できるよう部分的に深く掘削した。

南北方向に5ヶ所のトレンチを設定、交差点から西側では宮前遺跡の範囲を確定するために2ヶ所のトレンチを設定し、合計7トレンチ分の調査を行った。

1トレンチでは地表下1.4mで古墳時代の遺物を多量に含む土層が確認されたので、河川及び溝の中であると判断し、それ以上の掘削は行わなかった。後のトレンチでは明確な遺構が確認されなかったが、6トレンチ・7トレンチには遺物を含む土層が存在することが明らかとなった。18日に土層断面図の作成及び写真撮影を行い、20日に埋戻しを行い撤収した。

緊急調査 1996年度は新設路線部分の工事に先立って交差点の拡張及び歩道設置の工事が行われた。歩道部分の掘削後（この部分ではバックホーに平爪を用い平らに水田面が削平された）に現地を確認し土器片が集中する部分一箇所と浅羽大囲堤の基底部の図面を作成した。現地調査は12月16日～25日にわたって行い、この2ヶ所を集中的に調査した。

補足調査 1997年度早々に北野遺跡の発掘調査を実施することとなった。しかし、1トレンチより北の範囲で遺構の所在確認が終了していなかったため、工事の一環として97年3月3日～5日にわたって試掘確認調査を行い、1トレンチより北の調査範囲の確定を行った。

発掘調査 本調査は北野遺跡に対して行った。97年4月21日に器材を搬入し、発掘調査を開始した。遺構が集中する南側部分約420㎡に対しては遺構面が浅いので人力による表土剥ぎを実施した。

遺構の識別は、大溝1、焼土坑に関しては遺構内覆土が明瞭で識別が容易であったが、住居跡1・2、方形周溝遺構、柱穴は地山土と類似しており困難であった。このため、住居跡に伴う柱以外は、比較的平易に識別が出来るものに対してのみ検出を行った。結果的に掘立柱建物の存在は確認できたものの、そのプランの確認は果たせなかった。

今回の調査の中心は古墳時代の遺物を多量に持つ溝1である。調査にあたり溝に直行する方向にトレンチを設け、分層を行った後、溝の西側半分をこれに従いながら掘り下げていった。西側が溝底部まで調査されたのち、残る東側も同様にして掘り下げた。

遺構の調査が終盤に差し掛かった6月中旬にバックホーを用いて念のため道路新設部分の表土剥ぎを残る全面に対して実施。この段階で7トレンチ付近で確認していた浅羽大囲堤の基底部の続きを発見し、更に北端で一条の溝（大溝2）が存在することを確認した。大囲堤基底部は平面的に削り、そのプランを平面図に記入。溝はトレンチを設けて断面観察を行った。この部分は橋梁へのスロープが始まり、盛土工法となって保存されることから、それ以上の掘削は行わなかった。

このようにして全作業を6月30日に終え、翌7月1日に器材を撤収し調査を終了した。

3 環 境

北野遺跡・宮前遺跡が所在する磐田郡浅羽町は静岡県西部（旧遠江国）に属し、県内で最も広い遠

州海岸平野の東端に位置している。町域の八割近くまでを沖積低地が占めている。

町域の南側は遠州灘に面して砂堤が広がり、東側は海拔264mの小笠山多門天神社付近を最高所とする小笠山丘陵と接している。北側と西側は掛川市八高山付近より発した原野谷川によって概ね区切られ、平面的には三角形を呈している。

町域の多くを占める仮称浅羽低地は、大規模な排水工事が実施されるまでは排水不良地として地域住民を悩まし続けた。低地の地質の多くは粘土・炭混じりの粘土・泥炭からなっている。これは、縄紋前期に始まる海進（5,000～6,000年前）によって太田川・原野谷川の下流域に海水が流れ込み、入り江を形成したことから始まる。その後、海退現象に伴って入江の出口が砂州により塞がれて潟となり、砂州の背後は河川の堆積物によって徐々に埋められ後背湿地を形成する。

しかし、浅羽低地にはこの影響が少なかったため湿地の状態が最後まで続いた。特に現在の弁財天川の流域では、宝永四(1707)年の大地震により地盤が隆起するまで水域が残存したと考えられている。入り江を塞いだ砂州は現在も西ヶ崎から梅山を抜けて大須賀町横砂へ至る砂堤列として残っている。

低地の形成が進むと、太田川・原野谷川の流れは自然堤防を形成するようになる。自然堤防は、後背湿地との比高差が1～2mと僅かなものだが、起伏の乏しい沖積低地にあっては限られた高乾地であり、多くの遺跡がこの部分に集中している。浅羽低地には原野谷川の支流と考えられる古浅羽川が形成した自然堤防として、袋井市との境をなす諸井から新堀にかけての南北方向に微高地が残り、この上に複数の弥生時代後期以降の遺跡が見つかった。

これとは別に、浅羽低地の西側でも少し時代は下るが旧（古）原野谷川が形成した自然堤防が蛇行しながら南へと延びている。しかし、海岸沿いの砂堤列に遮られるので直接遠州灘に抜けられず、大きく東へと向かい潟湖に合流していた。ここからは、古墳時代中期以降の遺跡が見つかった。

このように浅羽低地は、大まかに見ると縄紋海進後に形成された東西方向の砂堤列、古浅羽川が形成した自然堤防、古原野谷川が形成した自然堤防、東側一帯には18世紀初頭まで残存した潟湖によって構成されていたといえる。本報告の北野遺跡はこの潟湖の南岸に接した低地に位置しており、これまで発見されている微高地上の遺跡群とは性格を異にする遺跡ということが特徴である。

4 歴史的環境

浅羽低地に古浅羽川の河川堆積による自然堤防の形成が進むと、この高乾地を利用した集落の形成が弥生時代後期以降始まる。後期の遺跡として諸井十二所、高道遺跡を挙げることができる。これに対し、段丘上からは中期に属する総数百基以上の方形周溝墓と後期の集落から構成される団子塚遺跡、北原遺跡、古新田遺跡が調査された遺跡として内容が明らかになっている。

弥生時代後期～古墳時代初期にかけての小海進によって潟湖は最大限に膨らみ、小笠山段丘末端近くまで入り込んでいたものと考えられる。図3はその頃を想定したものである。潟湖を中心とする湿地は直接遠州灘と繋がっており、天然の良港として利用価値の高いものであったと考えられ、古代に至る多くの主要遺跡が潟湖に沿った部分に集中し分布する。

古墳時代に入ると、潟湖西に接する自然堤防上に前期の拠点集落となる青木・新堀遺跡が形成され、纏向型祭祀との関連性が指摘される大型土坑群が多数見つかるとともに、S字甕の出土量も多い。

西部の自然堤防上でも前期の集落である西向遺跡が見つかった。ここは、遺構面が海拔1mに満たない低地であり、海退現象との関連で理解される。潟湖の東側、袋井市域には6世紀前半の衛門坂古窯跡群が位置している。この窯の対岸に所在する北野遺跡からは、この製品が多数出土する。



図2 浅羽低地を中心とした地形概念図

北部の古浅羽川の自然堤防上に位置する諸井十二所遺跡でも安定した集落が営まれ続け、土坑内から土器編年を行う上で良好な一括資料が得られている。これに隣接する楠宮遺跡からは大庭寺系の初期須恵器が採取されている。段丘上には5世紀後半を中心とする古新田遺跡がある。ここからは規格的な配置のもとに造られた掘立柱建物群が見つかり、豪族居館、あるいは宅と考えられている。祭祀土坑を中心にTK208型式の須恵器が多量に出土している。近年の周辺調査によって大規模な集落が存在することが確認されつつある。

古墳は小笠山丘陵末端の潟湖に望んだ痩せ尾根の稜線上と、中・低位の段丘上、南部の砂堤列上に営まれている。五世紀代の五ヶ山古墳群は痩せ尾根の稜線上に位置し、分散して分布する。A1号墳からは鉄刀1振と須恵器片しか出土しなかったが、B1号墳からは長大な割竹型木棺二基から我国最古級の銅芯金貼耳環、スズ製釧、ガラス小玉、堅櫛という装身具類を主体とする副葬品が出土した。

これに先行するB2号墳は葺石と埴輪を持つ二段築成の方墳で、主体部から甲冑・盾・豊富な鉄製品が出土し、5世紀中葉の県内最大規模を誇る堂山古墳の被葬者に関わる將軍の墓と考えられている。

段丘上には貫名地の古墳群と団子塚古墳群がある。A群は全長30m程の前方後円墳のA2号墳を中心に構成され、B群もやはり全長32mの前方後円墳B2号墳を中心に構成されている。ここからは、くびれ部で祭祀に伴う5世紀後半の須恵器が出土した。これは、古新田遺跡の居館と同年代であり、しかも両者の距離は僅か数十mであるので、近親者の墓と考えられる。団子塚古墳群は段丘の北端に位置し、6世紀前半から7世紀中頃までの数十基からなる古墳群で、群中で横穴式木芯粘土室、小石室の古墳が含まれている。

浅羽低地南側の東西に延びる砂堤列上には埴輪を伴い5世紀末～6世紀初頭に築造された地蔵山古墳(径40m)がある。これを中心として周辺にも数基存在し、古墳群を形成している。海岸地帯の砂堤列上という立地の特異性から、遠州灘の水利に関わる集団の墓地と考えられる。

以上、北野遺跡が形成された古墳時代までの状況を概説したが、当時内陸部に深く入り込んだ潟湖と遠州灘を中心とする水利との関わりで理解される遺跡が集中しており、北野遺跡の性格を理解する上で、この立地条件は大きな鍵となっている。

[参考文献]

加藤芳朗 1993「自然環境の変遷」『磐田市史』通史編上巻 原始・古代・中世 磐田市

加藤芳朗 1993「浅羽町新堀遺跡の地学的背景」『新堀遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

柴田稔(編) 1998『浅羽町史』資料編一 考古・古代・中世 浅羽町

[浅羽低地を中心とする弥生・古墳時代の遺跡一覧] (番号は図3に対応)

1. 大門大塚古墳(袋井市、径26mの円墳、6世紀中頃)
2. 松林山古墳(磐田市、全長107mの前方後円墳4世紀後半)
3. 高根山古墳(磐田市、径58mの円墳、4世紀後半)
4. 団子塚古墳群
5. 高尾向山古墳群
6. 貫名地A2号墳(全長約30mの前方後円墳、5世紀)
7. 貫名地B2号墳(全長約32mの前方後円墳5世紀後半)
8. 観音山古墳群(30～40mの円墳数基で構成、5世紀?)
9. 五ヶ山A1号墳(径20mの円墳、5世紀後半)
10. 五ヶ山B1号墳(全長約40mの前方後円墳? 5世紀中葉)
11. 五ヶ山B2号墳(28×33mの方墳、甲冑・盾・鉄製品、5世紀中葉)
12. 地蔵山古墳(径40mの円墳、5世紀末～6世紀初頭)

A. 掛之上I遺跡(袋井市) B. 大門I遺跡(袋井市) C. 諸井十二所遺跡 D. 楠宮遺跡 E. 古新田遺跡 F. 新堀遺跡 G. 青木遺跡 H. 衛門坂古窯跡群 I. 北野遺跡 J. 西向遺跡

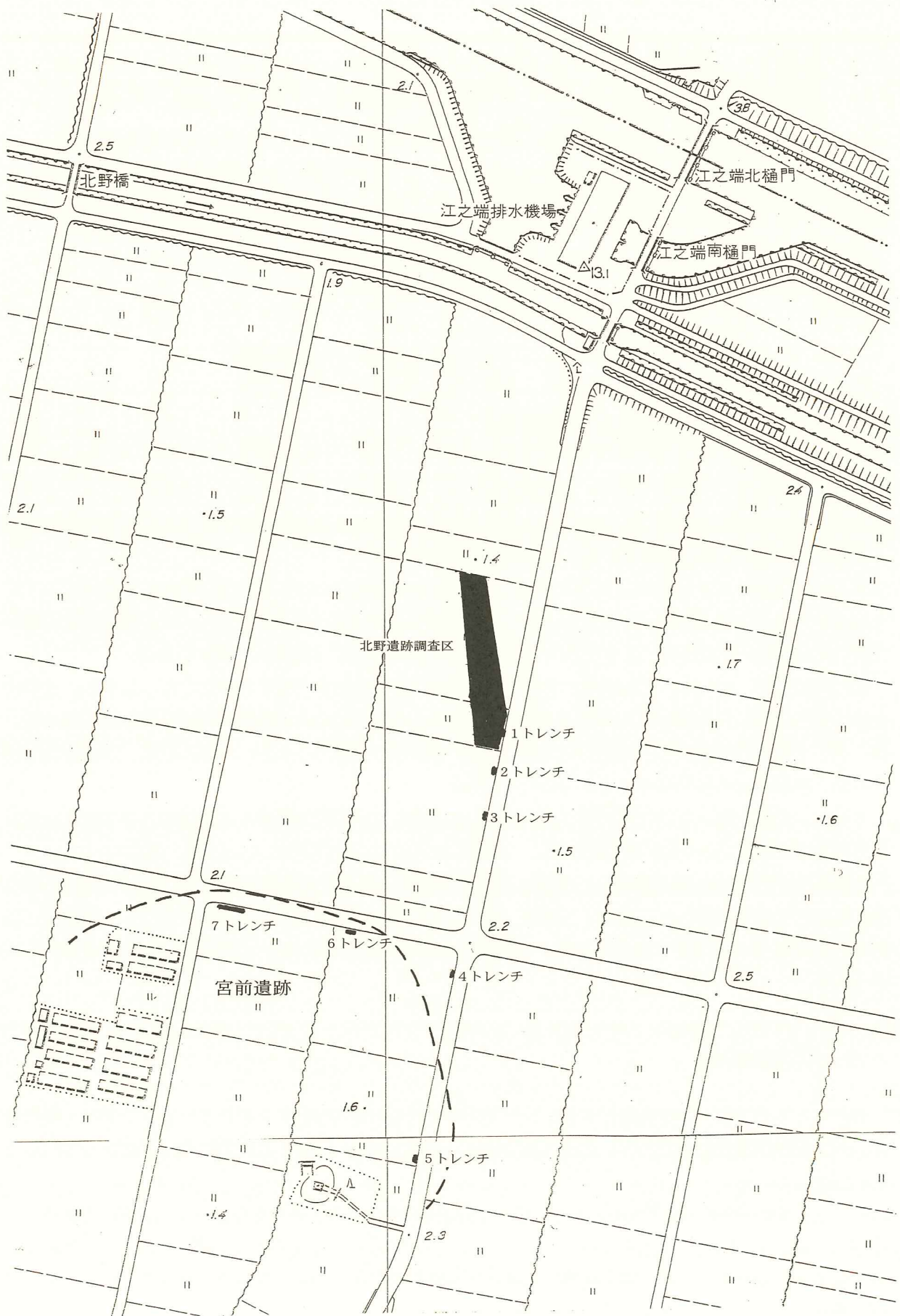


図4 北野遺跡・宮前遺跡調査位置図 (S=1/2,500)

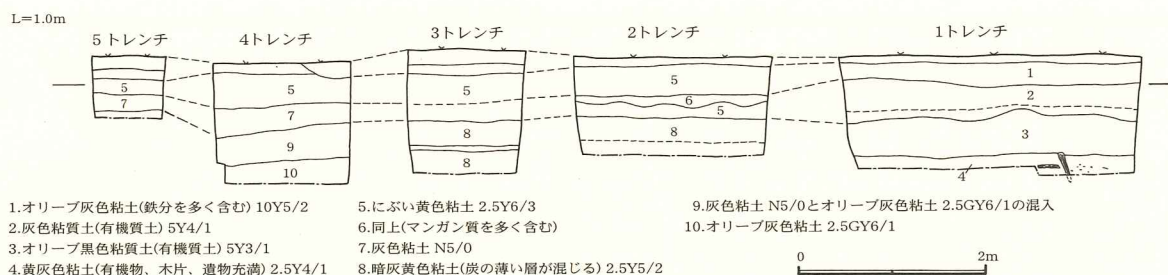


図5 宮前遺跡・北野遺跡柱状図

第2章 確認調査の概要

1 宮前遺跡・北野遺跡の調査概要

(1) 試掘確認調査の成果 (図5) 試掘を実施した7ヶ所のトレンチのうち、遺構が確認されたのは北端の1トレンチのみであった。潟湖縁辺の地質状況を把握するため、遺構が確認されない場合もグライ土層を一部掘り込み、土層観察と柱状図の作成を行った。

1トレンチから5トレンチまでの距離は約200mあるが両端でのレベル差は殆ど無く、土層も1トレンチから4トレンチまではほぼ水平に堆積し、宮前遺跡の範囲に含まれる5トレンチでは全体に20～30cm程急激に上がっており、この遺跡が微高地の上に位置することが改めて確認された。

(2) 宮前遺跡 5トレンチの北隣で古墳時代の土師器片が集中する箇所を発見した。しかし、土器は細片で風化が激しく、存在するはずの遺構の覆土も地山との違いが識別できず、輪郭が判然としなかった。そこで、記録段階ではドット図を作成し検討した(図6下、図版10-1)。その結果、この遺構は幅2m程、深さ20cm程の溝状遺構であると推定された。

7トレンチの東隣からは浅羽大囲堤と呼ばれ、近世初頭に浅羽低地の村々を水害から守るために築かれた堤防(全長13km)の基底部を確認し、土層断面図を作成して検討した(図6、図版10-2)。

この部分での盛土の幅は約12m、堤防の外側(図の左、東側)には溝が平行し、反対に内側では二本の杭が打ち込まれていた。恐らくこれは、盛り土を行うときの土留めではないだろうか。断面図の部分では約60cm分の盛土が残存していた。この堤の上部は圃場整備に伴って昭和40年代に削平されたものである。

2 調査の成果

調査に入るまでは、潟湖の南岸がトレンチで確認できるのではないかと考えていた。つまり、現在の江之端排水機場は近世まで残存した潟湖の名残で、古代・中世には更に広範囲に水域が広がっていたものと理解していた。

しかし、6世紀中葉の大溝を中心とする新たな遺跡の発見となり(小字名をとって北野遺跡と命名)、南100mの地点に所在する宮前遺跡(古代～中世)とは時代も性格も異なる遺跡が更に潟湖に近い地点で確認され、少なくとも古墳時代後期には周辺に水域が存在せず安定した陸地となっていたことが裏付けられた。

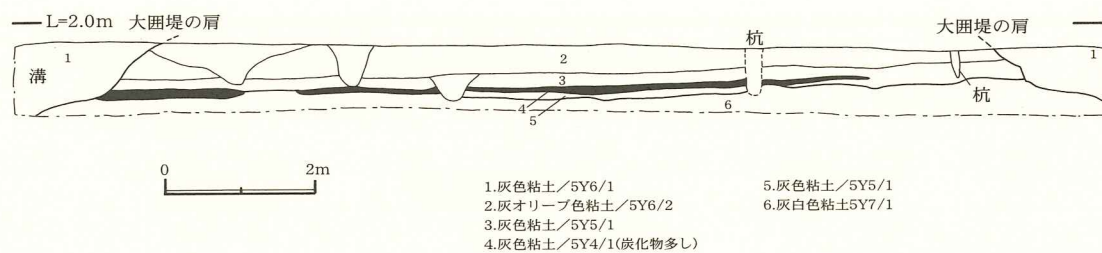


図6 宮前遺跡 浅羽大囲堤基底部土層断面(上)、溝状遺構遺物出土図(下)

第3章 北野遺跡の調査

1 調査の概要

(図7・8, 図版1)

北野遺跡の発掘調査は2つに分け、平面的な精査は試掘確認調査及び補足調査で把握した遺構集中箇所約420㎡に対して行った。その北側の残り部分は全体を重機で平らに掘削し、確認した遺構の平面プランを測量するだけに留めた。

調査の結果、南端で大溝1を確認、その北側に掘立柱群(全部で20穴を確認)、拡張を行った竪穴住居1棟、土坑4基(このうち1基は炭、焼け土が充満していたので特に焼土坑と命名して区別した)、方形周溝墓状の遺構(方形周溝墓とするには疑問が有るので、仮に方形周溝遺構と命名)1基、近現代の所産と推定される井戸1基、浅羽大囲堤に伴うと推定される溝(水田への取水口)の一部を確認した。

但し、最後に記した井戸と溝に関しては、遺構輪郭の検出と任意的な掘削に留め、全掘はしていない。

第1章2節の調査の経過と方法においても触れたが、これらの遺構の識別は近現代の新しいものを除いて大溝1、土坑、焼土坑においては容易であったが、それ以外の掘立柱群、住居跡、方形周溝遺構に関しては遺構内覆土が地山に類似しており、困難であった。

これは、沖積低地の調査において常に課題となる点である。例えば掘立柱の場合、柱痕跡は褐色系の土となって識別できるものの、掘方内の地山を埋戻した覆土は見分けが難しく、豊富な経験が必要とされる。北野遺跡の調査においても遺構検出にあたって、その識別は難しく、遺構と認識したものに関しては、全て半載、及び畔の観察を第一に行い、地山土と覆土の違いに留意しながら慎重に進めた。

しかし、掘立柱建物については、平面プランの認定には至らず、大溝1の北端から約12mの範囲に集中して存在することだけがわかった。

北側の調査区では大溝2と、宮前遺跡の調査で確認された浅羽大囲堤基底部の続きを確認した。

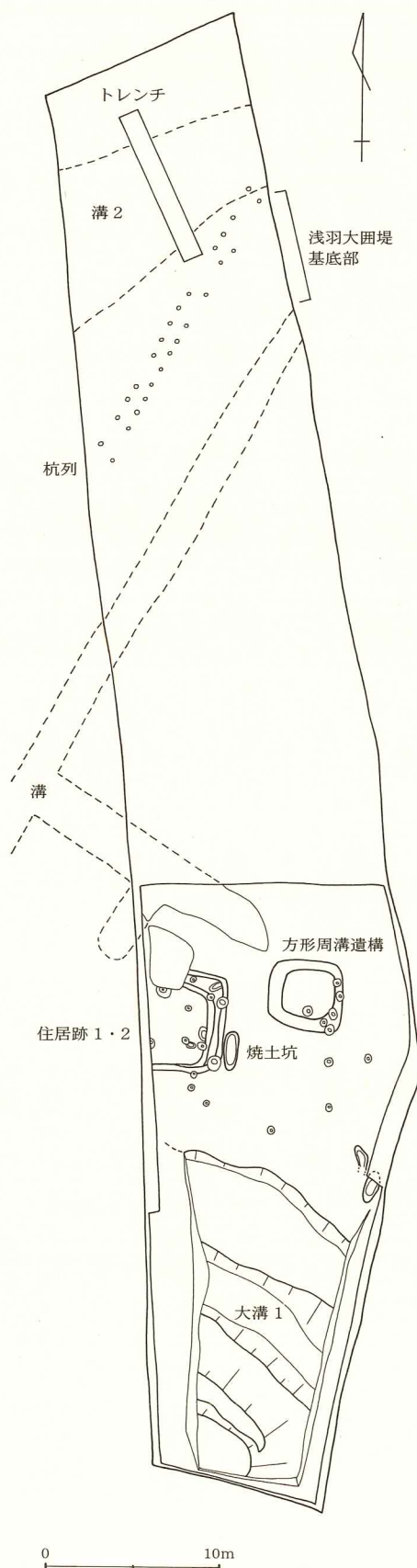


図7 北野遺跡遺構配置図

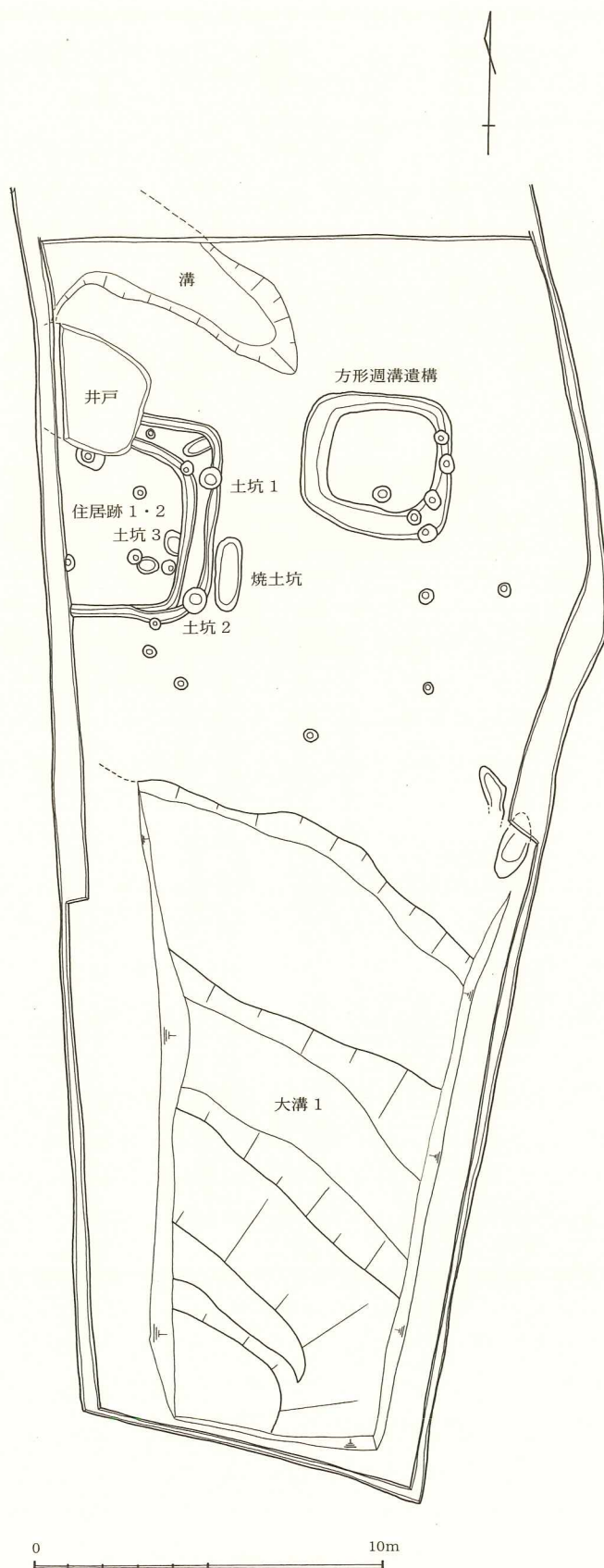


図8 北野遺跡遺構図

2 遺 構

(1) 住居跡 1・2 (図9, 図版4)

古墳時代特有の隅丸方形プランの竪穴住居で、周溝の切り合い関係によって、東側と北側に60~70cm程拡張している状況が確認された。西北は近現代の井戸によって破壊されている。西側は調査区の外側になるが、全体の7割程が確認されたものであろう。

古段階を住居跡1とすると、南北方向での周溝外側での規模は5.05m。これに伴う掘立柱は柱穴5・6と考えられ、柱穴を含めた南北方向の断面を示した。

新段階を住居跡2とすると、南北方向での周溝外側での規模は5.80m。これに伴う掘立柱は柱穴1・2・3・4と考えられ、共に東西方向の断面を示した。住居跡1と2の掘立柱を比較すると、拡張した住居跡2の方が、10cm以上深く掘られ、しかも大振りになっていることが観察された。土坑3は住居跡2に伴う貯蔵穴ではないかと推定している。

(2) 方形周溝遺構 (図10, 図版5)

四方に周溝を巡らした方形周溝墓状の遺構で、周溝端での最大規模は東西方向が4.3m、南北方向が4.1mである。周溝の幅は40~80cmと一定しないが、北側と東側は狭く、西側と南側は広い。遺構検出面から周溝底部までの深さは約30cm前後である。

溝内部の覆土は地山に類似するが、詳細に観察すると、特に溝底部付近の土は有機質を多く含んだ土が堆積している(図版8-1参照)。

周溝内側の平坦部には土坑等の施設は存在しないが、複数の杭跡と考えられる土色の変化する部分が観察された。この遺構は単独に存在し、規模も小さく、内部に複数の杭と考えられる痕跡が観察されることから、墓以外の性格を想定する必要があるの

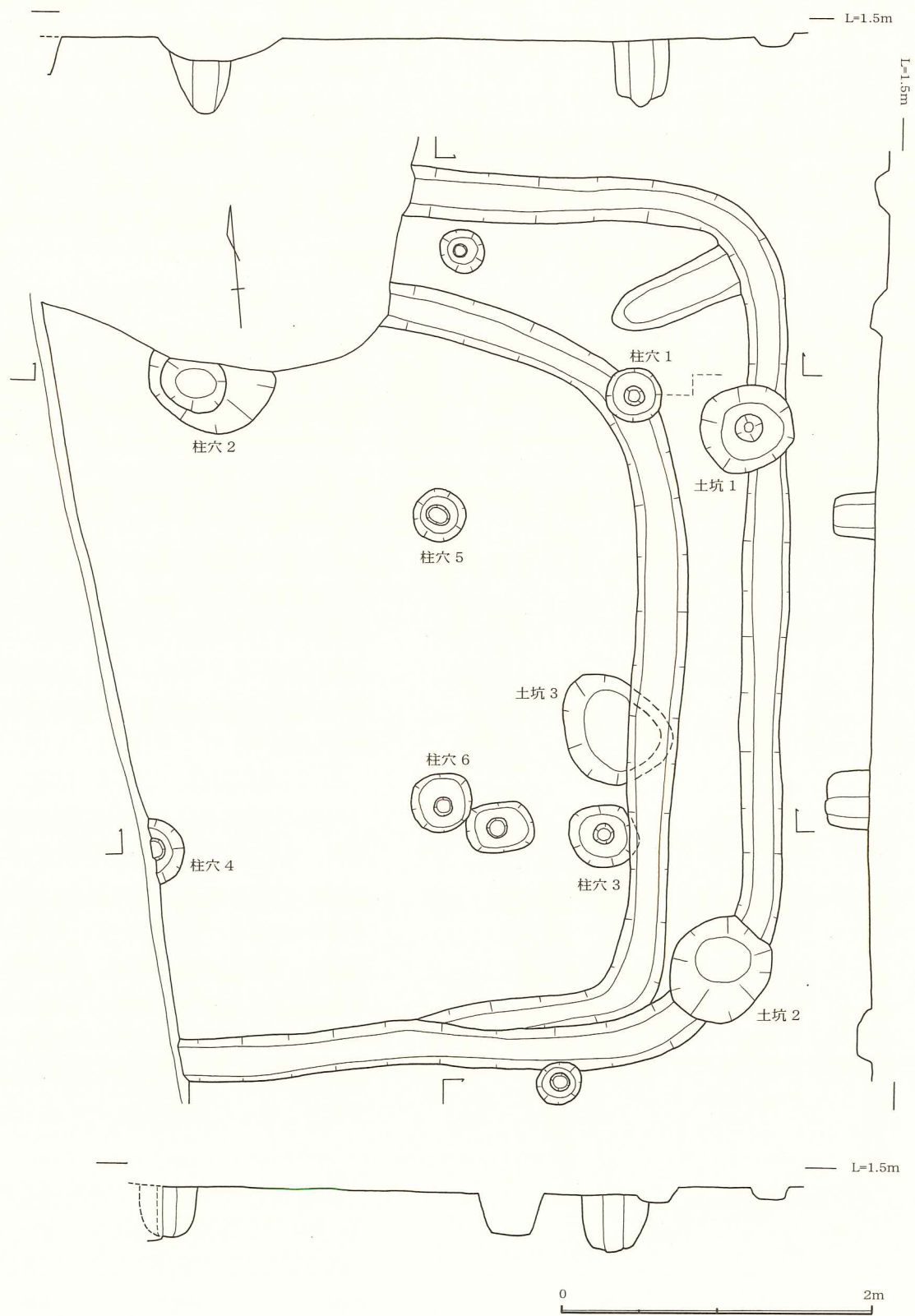


图9 住居跡1・2実測図

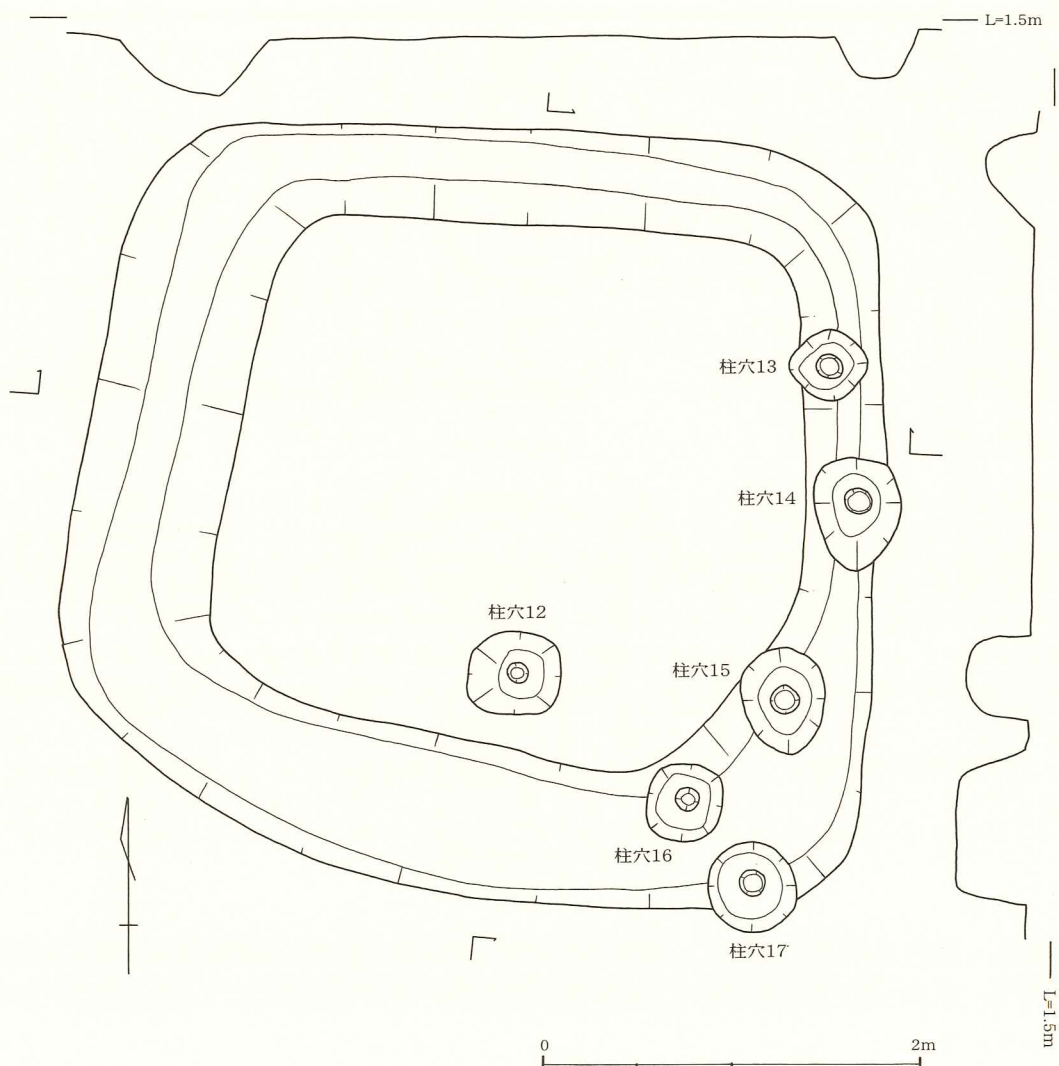


図10 方形周溝遺構実測図

ではないだろうか。一案として、祭祀に関する遺構の可能性も検討したい。

この遺構に絡む掘立柱は全て、方形周溝遺構より新しいものである。

(3) 焼土坑 (図11, 図版6) 縦210cm、幅80cm、遺構検出面からの深さ22cmの規模を有する長円形の土坑である。遺構内覆土は二層に分けられる。1層は炭・土師器片・焼土のブロックを多量に含んだ暗赤褐色粘質土(5YR3/2)、2層は土師器片・炭を多く含んだ黒色粘土(7.5YR2/1)である。土師器片は図化できないほどの細片だが、古墳時代のものである。

(4) 土坑1 (図11, 図版8-2) 径110~120cm、遺構検出面からの深さ112cmの規模を有する円形の土坑で、底部はすばまり二段掘りとなっている。遺構内覆土は三層に分けられる。1層は炭・土師器片混じりの明黄褐色粘質土(10YR6/8)、2層は地山ブロックを含んだ明黄褐色粘質土(10YR6/8)、3層は炭・土師器片の混じる青灰色粘土(5B5/0)である。

(5) 土坑2 (図11, 図版8-3) 径120~140cm、遺構検出面からの深さ60cmの規模を有する円形の土坑で、断面はすり鉢状を呈している。遺構内覆土は二層に分けられる。1層は炭・土師器片の混じる暗褐色粘質土(10YR3/4)、2層は黒褐色粘質土(10YR3/1)である。

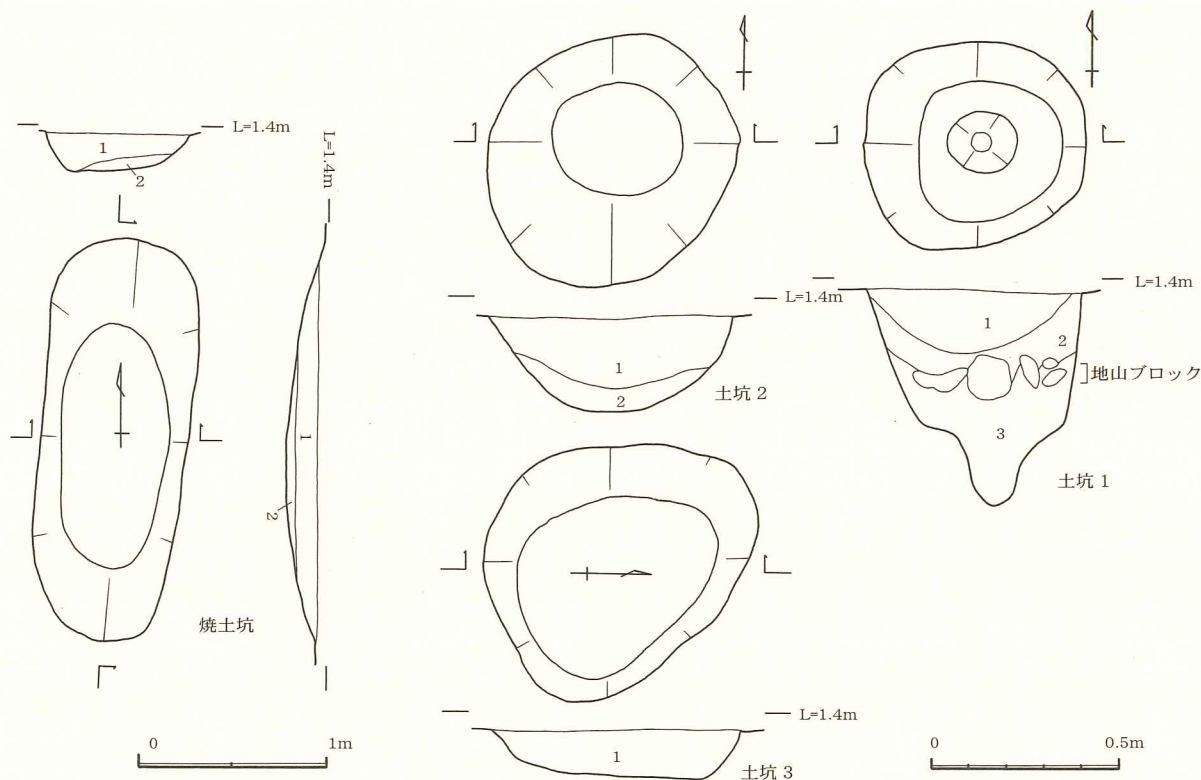


図11 土坑集成図

(6) 土坑 3 (図11, 図版 8-4) 径130~160cm、遺構検出面からの深さ35cmの規模を有する楕円形の土坑で、遺構内覆土は土師器片の混じる黒褐色粘質土(10YR2/2)である。住居跡2に伴う貯蔵穴と推定している。

(7) 大溝 1 (図12, 巻頭図版 2・図版 2・3) 幅13~14m、遺構検出面からの最大の深さ1.9mの規模を有する溝である。調査区内で最も深い箇所は西端の部分で、海拔-0.75mとなっている。

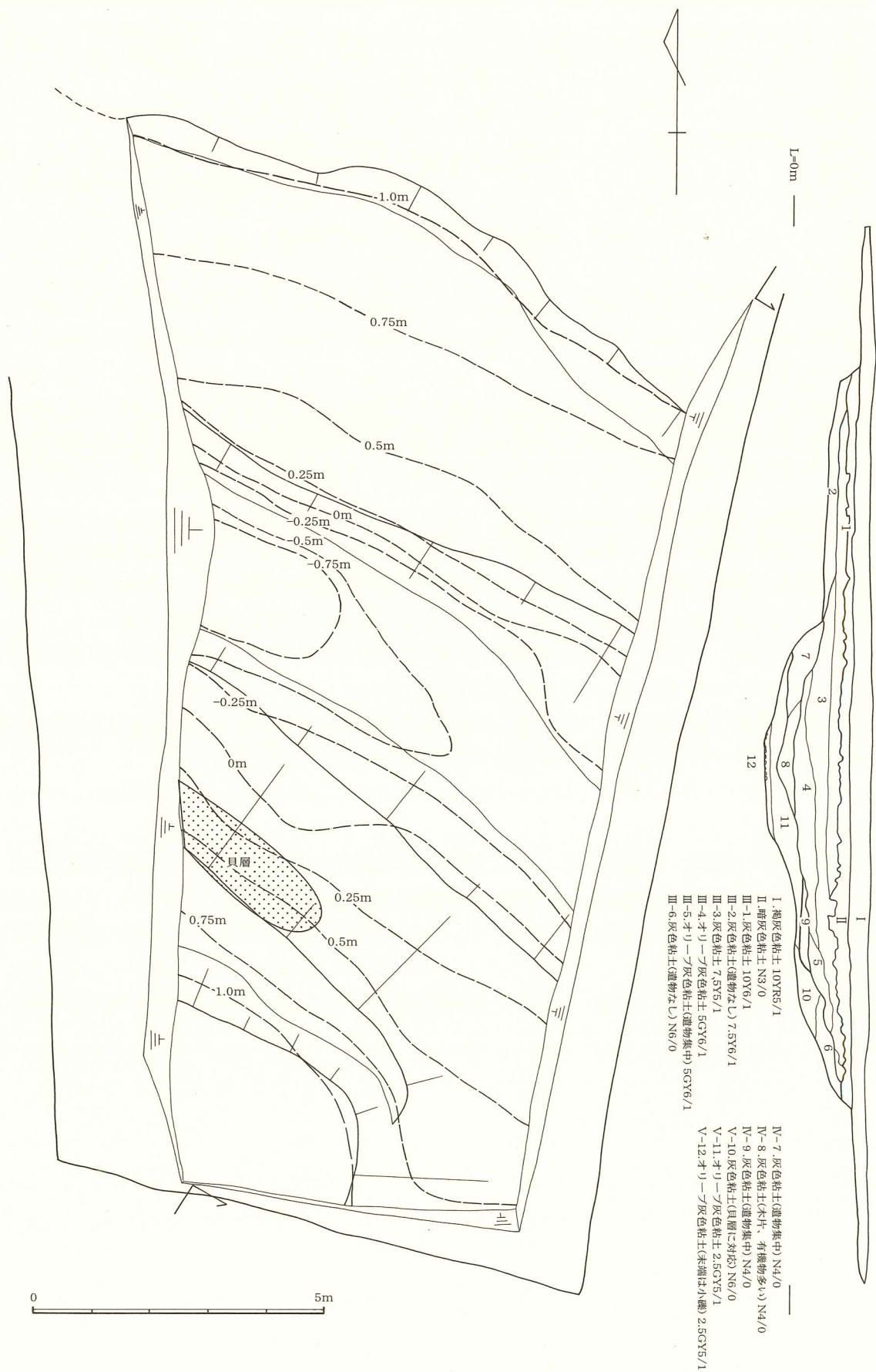
遺物の殆どがこの溝内から出土した。但し、全域から出土するわけではなく、概ね各層の中でまとまって出土しているので、その傾向を中心に記述する。

溝の土層は大きく5層に分けることができる。Ⅰ層は溝埋没後の窪みに堆積した土で、褐灰色粘土(10YR5/1)である。7世紀代に位置付けられる壺の蓋N0,142、これに山茶碗が1点出土している。

Ⅱ層は溝機能が消失した後に堆積したもので、溝の全域に広がっている。土層は暗灰色粘土(N3/0)である。NO,40のTK209型式に平行する湖西産の須恵器杯身や、湖西産の7世紀代の須恵器がこの層から出土する土器の下限と考えられ、その頃には完全に埋没したものと考えられる。

Ⅲ層は最も厚みのある部分で、灰色粘土を主体としている。1~6層までがこの土層に相当する。Ⅲ層から出土した遺物の多くは5層(Ⅲ-5)としたオリーブ灰色粘土(5GY6/1)からの出土である(図版 3-2 参照)。この層には木片や有機質が多く含まれていたが、木製品は見られなかった。4層(Ⅲ-4)からも遺物が出土している。3節の遺物の一覧表に示した出土層でⅢ層と記してあるものの多くはⅢ-4層からの出土である。

Ⅳ層もやはり灰色粘土を主体とする土層で、7~9層がこれに相当する。木片を中心に有機質が多く含まれ、土器片も多量に混じっている。堆積の厚みは薄い、この土層からの出土品が最も多い。



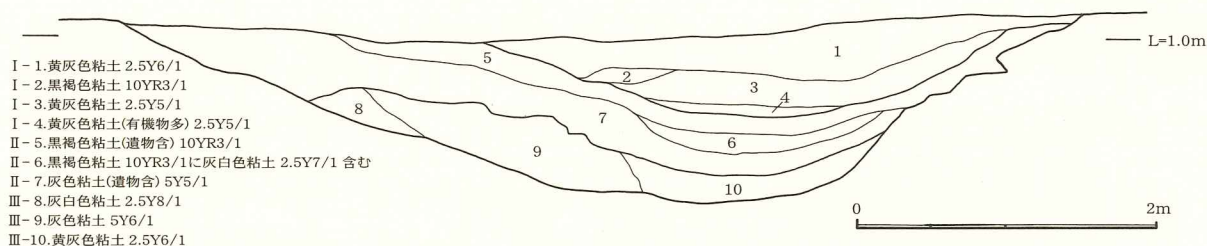


図13 大溝2土層断面図(トレンチ部分)

特に7層(Ⅳ-7)と9層には土器片が集中していた。この土層は溝の北寄りと南寄りに堆積しており、両側から投棄されたものであろう。7世紀に下る湖西産の須恵器も若干含まれるが、殆どの製品がTK10型式に平行する時期のものである。

V層が最下層である。10~12層がこの土層に相当する。遺物の多くは最下の12層(V-11)から出土している。この土層の末端は礫層となっている。遺物N0,141の唯一の弥生土器片は礫上面から出土した。数は少ないが5世紀後半の土師器もこの層から出土し(N0,126、N0,113)、TK10型式に平行する時期より新しい時代の遺物は見られない。

V層からは貝層(地点貝塚)が確認された。但し、全域に広がっているわけではなく断面では観察できない。調査区の西壁を中心に幅1m以上、厚み40cm程の堆積が3m程続いていた。断面観察部分の10層(V-10)に相当する。遺物N0,143のミニチュアの手捏土器は貝層からの出土である。

(8) 大溝2 (図13、図版7-1) 調査区の北端で確認した。浅い盛土工法が用いられる部分なので、全面掘削は行わずトレンチを1本設定し、断面観察を行った。

土層は大きくⅢ層に分けることができ、遺物の多くは5層(Ⅱ-5)の底部から集中して出土し、他には数点が7層(Ⅱ-7)の窪み(Ⅲ-8の上)に溜まるようにして出土している。

大溝2に伴う土器は大溝1の時期と同じ6世紀前~中葉を中心とするもので、両者は並存していたものと考えられる。

(9) 浅羽大囲堤 (図7、図版7-2) 調査区の北端で確認した。宮前遺跡の土層断面で発見した二本の杭列をここでは平面的に確認した。同様に堤の外側に平行する溝も存在している。

宮前遺跡の方は基底部の幅が約12mであったが、杭列を基準に推定すると、北野遺跡の部分では半分の約6mになってしまう。

図7では昭和30年代の『土地法典』を参考に方形周溝遺構近くで止まる溝との関係を復元してみた。

3 遺物

今回の調査でポリコンテナ30箱分の遺物が出土した。ほとんどが土器で、そのなかから146点分を図示した。大溝2の2点を除いてその大部分が大溝1からで、Ⅳ層に集中している。住居跡1・2、焼土坑からも少量、土師器が出土しているがいずれも細片のため図示できなかった。

その内訳は殆どが古墳時代後半期の土器で、須恵器、土師器が大半をしめ、弥生土器、土製品、石製品、他に獣骨、貝などの自然遺物が出土している。以下、種別ごとに分けて述べたいと思う。

(1)須恵器 器種としては坏蓋、坏身、高坏、甕、壺、台付盃、フラスコ瓶、平瓶、罍、短頸埴、高坏形器台が出土している。

1～13は坏蓋である。1・2・5～12は器径が12.1～14.9cmで器高が4.1～5.2cm。天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもつもの、沈線によって稜を造り出しているもの、口縁部は、やや外に開くもの、直下するものなどが見られる。1・2は稜の直ぐ上の天井部をナデて凹ませていることから、尾張系の技法が用いられている。8は天井部内面に青海波叩きを残す。これらはⅢ期前葉（TK10平行）に位置付けられる。

3・4・13は器径が13.2～14.3cmで器高が3.3～4.4cm。天井部と口縁部の境に沈線を引き口縁部が直下するものと外に開くもの、口縁端部に甘い段を有するものと丸くおさめるものが見られる。これらはⅢ期中葉（TK43平行）に位置付けられる。

14～42は坏身で、14・15は立ち上がりは直立し、口縁端部に甘い段をもち、体部はやや丸い。Ⅱ期（MT15平行）に位置付けられる。16～29・31・33・35・37・39・40は立ち上がりが直立するものと内傾するもの、口縁端部はわずかに段の痕跡をもつものと丸くおさめるものが見られる。16は底部内面に同心円叩きを残す。これらはⅢ期前葉（TK10平行）に位置付けられる。

30・32・34・36・38は立ち上がりが短くなり内傾するものが見られる。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。Ⅲ期中葉（TK43平行）に位置付けられる。

40は湖西産でⅢ期後葉（TK209平行）に位置付けられる。41・42も湖西産でⅣ期前半（TK217平行）に位置付けられる。

43～47は高坏で、43・44・46・47がⅢ期前葉（TK10平行）、45は湖西産で7世紀代に位置付けられる。

49～53・57～70は甕である。53を除きⅢ期前葉（TK10平行）に位置付けられる。53は湖西産で7世紀代に位置付けられる。

48・54～56・73～76・81は壺である。75・76・81を除きⅢ期前葉（TK10平行）に位置付けられる。81はⅢ期中葉（TK43平行）に位置付けられる。75・76は湖西産で7世紀代に位置付けられる。73は器台の上に乗る壺の口縁部であろう。77は台付盃である。78はフラスコ瓶で口縁部の上下端に強い横ナデを施している。77・78共、湖西産で7世紀代に位置付けられる。79・80は平瓶の口縁部でⅢ期中葉（TK43平行）に位置付けられ、80はカキ目が施される。

72は、罍か。口縁部で櫛描波状文が施される。82～84は、罍で82・83は口縁部でⅢ期前葉（TK10平行）に位置付けられ、櫛描波状文が施される。84は胴部でⅢ期中葉（TK43平行）に位置付けられ、肩部に一条の沈線を施している。85～87は短頸埴でⅢ期前葉（TK10平行）に位置付けられる。

71・88は高坏形器台で、71は坏部で内面の叩きを擦り消している。88は脚部でスカシが見られる。142は壺の蓋か。湖西産で7世紀代に位置付けられる。

1・4・6・8・9・11～13・23～26・28～34・36～42・44～48・50・52～56・58～74・79～88・144は衛門坂古窯跡の製品である。

6は、他の坏蓋と比べて器径も大ぶりで器高も高く、胎土も衛門坂窯産のものとは異質で湖西窯産に似ていることから湖西窯産の可能性はあるが、いずれにしても搬入品として考えられる。

5・7・10・14～22・27・35・43・49・51・57については、衛門坂窯産、または湖西窯産に似ているという意見があるため、ここでは両方の可能性を指摘する程度に留めたいと思う。

(2)土師器 器種としては、坏、模倣坏、高坏、長頸埴、小型埴、小型鉢、壺、甕、鍋、甗が出土している。

89～95は坏で89は内斜口縁でⅠ期中葉（TK208平行）に位置付けられる。90～95は丸底で口縁部が内湾する。

96～106は模倣坏で口縁部が外側に開き口縁端部を少しつまむもの、口縁部がほぼ直立するものなどがみられる。須恵器の坏蓋を意識したものと思われる。102～106は、立ち上りが直線的なものと内湾するものが見られる。100・102はⅡ期（MT15平行）に位置付けられ、それ以外はⅢ期中葉（TK10平行）に位置付けられる。

107～119は高坏で112・114はⅢ期後葉（TK43平行）に位置付けられる。113は坏部で口縁部は直線的に開き、口縁端部を丸くおさめる。Ⅰ期中葉（TK208平行）に位置付けられる。115～118は口縁部を外反させ体部が丸みをもつ坏に脚を付けている。119は坏部が碗の形をしており脚柱部内面に穴を開けてから絞っている。

120は長頸埴である。121は小型埴で口縁部は、ほぼ直線的に開き胴部は肩が張らない。Ⅰ期中葉（TK208平行）に位置付けられる。

122・123は小型鉢で口縁部がくの字状に開き、法量的に大小になりそうなものが見られる。124・125は折り返し口縁の壺である。

127～135は甕である。132・133はⅡ期（MT15平行）に位置付けられる。130・131は底部に籠目痕が見られる。籠目痕の下限は、Ⅲ期中葉（TK10平行）と言われている。136は鍋の台部か。137は鍋の口縁部である。内面に煤が付着している。

138～140は甗である。138・139は同一個体と思われ、口縁端部を内側に折り返し、底部をすばませている。140は底部の籠目痕をナデ消して、刺突によって穿孔している。

土師器も須恵器と同じⅣ層中から出土していることからほとんどⅢ期中葉（TK10平行）に位置付けて良いだろう。

(3)弥生土器 141は菊川式新段階の甕で口縁部を折り返して端部にクロス刺突文が施されている。混入品である。

(4)土製品 143は手捏土器で甕を模したものと思われる。144は陶製の紡錘車で他の須恵器と同じⅣ層中に出土していることからⅢ期中葉（TK10平行）と考えられる。静岡県内では今のところ最古の出土例である。

(5)石製品 145・146は砥石で凝灰岩製である。両方とも4面に使用痕が認められる。

出土遺物観察表

遺物 番号	出土場所	種別	器種	残存 率%	法 量(cm)				焼成	色調	胎土	その他
					器高	器径	口径	底径				
1	大溝 1 V層	須恵器	坏蓋	85	4.7	14.3			良好	暗灰色	密	焼きひずみあり
2	大溝 1 IV層	須恵器	坏蓋	65	4.1	13.3			良好	暗灰色	密	反転 焼きひずみあり
3	大溝 1 IV-7層	須恵器	坏蓋	45	4.3	14.1			良好	暗灰色	密	反転
4	大溝 1 IV-7層	須恵器	坏蓋	55	3.3	14.3			良好	暗灰色	密	反転
5	大溝 1 IV-7層	須恵器	坏蓋	50	5.0	14.05			良好	灰白色	密	反転
6	大溝 1 IV-7層	須恵器	坏蓋	25	5.2	14.9			良	灰白色	密	反転
7	大溝 1 IV層	須恵器	坏蓋	20	4.4	13.3			良	灰色	密	反転 内面に使用痕あり
8	大溝 1 IV層	須恵器	坏蓋	50	5.15				良好	灰色	密	反転 ひずみが大きく口径不明
9	大溝 1 V層	須恵器	坏蓋	20	4.9	12.1			良好	暗灰色	密	反転
10	大溝 1 IV層	須恵器	坏蓋	55	4.2	13.0			良	灰色	密	
11	大溝 1 IV層	須恵器	坏蓋	70	4.8	12.3			良好	暗灰色	密	
12	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏蓋	50	4.9	12.6			良好	暗灰色	密	
13	大溝 1 III-5層	須恵器	坏蓋	25	4.4	13.2			良好	灰色	密	反転
14	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	45	5.15	15.0	13.1		良好	灰色	密	反転
15	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	55	5.2	15.4	13.0		良好	灰色	密	反転
16	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	50	5.6	14.6	12.0		良好	明褐色	密	反転
17	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	55	5.8	14.6	12.5		良	灰色	密	反転
18	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	50	5.7	14.0	11.75		良	灰白色	密	反転
19	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	45	5.6	15.6	13.3		良	明緑灰色	密	反転
20	大溝 1 V層	須恵器	坏身	60	5.6	15.4	13.2		やや不良	灰白色	密	
21	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	50	5.2	14.7	12.3		良	灰白色	密	
22	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	50	5.5	14.7	12.4		良	灰白色	密	
23	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	30	4.6	13.5	11.2		良好	暗灰色	密	反転
24	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	15	4.7	14.6	12.8		良	灰色	密	反転
25	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	30	5.4	14.5	12.8		良	灰色	密	反転
26	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	80		15.7	12.3		不良	浅黄褐色	密	
27	大溝 2	須恵器	坏身	45	5.5	17.05	15.1		良	灰白色	密	反転
28	大溝 1 II層	須恵器	坏身	25	5.1	14.1	12.1		良好	黒褐色	密	反転
29	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	30	4.9	13.2	11.2		良好	赤黒色	密	反転
30	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	35	4.4	14.8	12.9		良好	暗灰黄色	密	反転
31	大溝 1 III-5層	須恵器	坏身	75	4.1	14.0	11.4		良好	灰色	密	
32	大溝 1 III層	須恵器	坏身	30	4.3	14.6	11.9		良好	暗灰色	密	反転
33	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	70	4.3	13.7	10.6		良好	黒褐色	密	
34	大溝 1 III-5層	須恵器	坏身	85	5.0	15.1	13.0		良好	暗灰色	密	
35	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	65	4.7	13.3	10.7		やや不良	灰白色	密	
36	大溝 2	須恵器	坏身	20		15.1	12.1		良好	暗灰色	密	反転
37	大溝 1 IV-9層	須恵器	坏身	25		14.7	11.0		良好	灰色	密	反転
38	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	25		15.1	12.6		良好	暗灰色	密	反転
39	大溝 1 IV-7層	須恵器	坏身	90					良好	暗灰色	密	ひずみが大きく器高、器径、口径とも不明
40	大溝 1 II層	須恵器	坏身	85	3.8	14.0	11.3		良	灰色	密	湖西産
41	大溝 1 II層	須恵器	坏身	55	3.9	11.05	8.8		良好	灰色	密	反転 湖西産
42	大溝 1 IV層	須恵器	坏身	15		9.1			良好	灰色	密	反転 湖西産
43	大溝 1 IV層	須恵器	高坏	45		14.6	12.1		良	黄灰色	密	反転
44	大溝 1 IV層	須恵器	高坏	95	9.3	9.6		7.4	良好	灰色	密	
45	大溝 1 IV層	須恵器	高坏	45				11.0	良好	灰白色	密	湖西産
46	大溝 1 V層	須恵器	高坏	40				8.9	良好	灰色	密	
47	大溝 1 IV層	須恵器	高坏	5				15.8	良好	暗灰色	密	反転
48	大溝 1 III-V層	須恵器	壺	70	23.1	28.8	16.7		良好	灰色	密	
49	大溝 1 IV-9層	須恵器	甕	90	34.2	33.6	18.3		良好	黒灰色	密	
50	大溝 1 IV層	須恵器	甕	60		30.2	16.3		良	灰色	密	
51	大溝 1 IV層	須恵器	甕	15		32.6	18.5		良	灰色	密	反転
52	大溝 1 IV層	須恵器	甕	20			21.25		不良	淡黄色	密	反転
53	大溝 1 IV層	須恵器	甕	5			20.7		良好	灰白色	密	反転 湖西産
54	大溝 1 IV層	須恵器	壺	5			20.0		良好	暗灰色	密	反転
55	大溝 1 II層	須恵器	壺	5			15.0		良好	黒灰色	密	反転

遺物 番号	出土場所	種別	器種	残存 率%	法 量(cm)				焼成	色調	胎土	その他
					器高	器径	口径	底径				
56	大溝 1 IV-7層	須恵器	壺	5			14.8		良	灰白色	密	反転
57	大溝 1 IV層	須恵器	甕	5			18.3		良	灰色	密	反転
58	大溝 1 II層	須恵器	甕	5					良	灰白色	密	
59	大溝 1 III層	須恵器	甕	5					良	灰色	密	
60	大溝 1 III-3層	須恵器	甕	5					不良	にぶい橙色	密	
61	大溝 1 IV層	須恵器	甕	5					不良	灰白色	密	
62	大溝 1 V層	須恵器	甕	5					やや不良	灰白色	密	
63	大溝 1 II層	須恵器	甕	5					良好	黒灰色	密	
64	大溝 1 II層	須恵器	甕	5					良好	灰色	密	
65	大溝 1 IV-9層	須恵器	甕	5					良好	灰色	密	
66	大溝 1 IV層	須恵器	甕	5					不良	橙色	密	
67	大溝 1 IV層	須恵器	甕	5					良好	灰色	密	
68	大溝 1 III-5層	須恵器	甕	5					良好	暗灰色	密	
69	大溝 1 IV-9層	須恵器	甕	5					良	灰色	密	
70	大溝 1 III層	須恵器	甕	15					良好	暗灰色	密	
71	大溝 1 IV層	須恵器	高坏形器台	5					良好	灰色	密	坏部
72	大溝 1 II層	須恵器	罍?	5					良好	灰色	密	
73	大溝 1 IV層	須恵器	壺	5			17.6		良好	灰色	密	反転
74	大溝 1 IV-9層	須恵器	壺	5					良好	黒灰色	密	
75	大溝 1 II層	須恵器	壺	5					良好	灰色	密	湖西産
76	大溝 1 III-5層	須恵器	長頸壺	5					良好	灰白色	密	湖西産
77	大溝 1 III-5層	須恵器	台付盃	35					良好	灰色	密	湖西産
78	大溝 1 IV-9層	須恵器	フラスコ瓶	15			7.8		良好	灰色	密	反転 湖西産
79	大溝 1 IV-9層	須恵器	平瓶	10			8.6		良好	灰色	密	反転
80	大溝 1 IV-9層	須恵器	平瓶	10			8.8		良好	灰色	密	反転
81	大溝 1 IV層	須恵器	壺	5					良好	灰色	密	反転
82	大溝 1 IV-7層	須恵器	罍	5					良好	灰色	密	反転
83	大溝 1 IV層	須恵器	罍	10					良好	黒灰色	密	反転
84	大溝 1 IV層	須恵器	罍	55		10.0			良好	灰色	密	
85	大溝 1 III層	須恵器	短頸埴	5		12.8			良好	暗灰色	密	反転
86	大溝 1 IV層	須恵器	短頸埴	60		12.1			良好	灰色	密	反転
87	大溝 1 IV層	須恵器	短頸埴	50	9.2	15.4	9.4		良好	灰色	密	
88	大溝 1 IV層	須恵器	高坏形器台	10					良	灰白色	密	脚部 スカシあり
89	大溝 1 III層	土師器	坏	95	4.5		12.3		良	灰白色	密	
90	大溝 1 V層	土師器	坏	50	5.0	14.6	13.6		良	淡赤橙色	密	反転
91	大溝 1 V層	土師器	坏	35	4.9	14.2	13.3		良	灰白色	密	反転
92	大溝 1 IV-10層	土師器	坏	85	5.1	14.3	13.0		良	淡赤橙色	密	
93	大溝 1 IV-9層	土師器	坏	55	4.8	14.0	12.9		良	浅黄橙色	密	反転
94	大溝 1 IV-9層	土師器	坏	90	5.45	14.0	13.4		良	浅橙色	密	
95	大溝 1 IV-9層	土師器	坏	75	6.2	14.0	13.2		良	浅黄橙色	密	
96	大溝 1 IV-7層	土師器	模倣坏	55	4.7	14.1			良	浅黄橙色	密	反転
97	大溝 1 II層	土師器	模倣坏	55	5.6	14.2			良	灰白色	密	反転
98	大溝 1 IV-7層	土師器	模倣坏	50	4.7	14.2			良	灰白色	密	反転
99	大溝 1 IV-7層	土師器	模倣坏	55	4.1	14.25			良	にぶい橙色	密	反転
100	大溝 1 IV-7層	土師器	模倣坏	55	4.2	13.6			良	浅黄橙色	密	反転
101	大溝 1 IV層	土師器	模倣坏	40	4.8	13.5			良	灰白色	密	反転
102	大溝 1 IV-9層	土師器	模倣坏	45	4.8	14.4	11.7		良	にぶい橙色	密	反転
103	大溝 1 IV層	土師器	模倣坏	60	4.75	13.85	11.8		良	にぶい橙色	密	
104	大溝 1 IV層	土師器	模倣坏	40	5.05	14.6	12.5		良	にぶい橙色	密	反転
105	大溝 1 IV-9層	土師器	模倣坏	90	4.95	13.7	11.35		良	にぶい橙色	密	
106	大溝 1 IV-7層	土師器	模倣坏	25		13.8	12.4		良	にぶい橙色	密	反転
107	大溝 1 IV-7層	土師器	高坏	35				12.1	良	浅黄橙色	密	
108	大溝 1 IV層	土師器	高坏	35				11.8	良	浅黄色	密	
109	大溝 1 IV層	土師器	高坏	30				11.6	良	浅黄橙色	密	反転
110	大溝 1 IV-7層	土師器	高坏	30				11.5	良	灰白色	密	反転
111	大溝 1 III-5層	土師器	高坏	70	12.0		15.0	8.8	良	にぶい橙色	密	
112	大溝 1 IV層	土師器	高坏	60	15.0	15.2		12.2	良	浅黄橙色	密	反転

遺物 番号	出土場所	種別	器種	残存 率%	法 量(cm)				焼成	色調	胎土	その他
					器高	器径	口径	底径				
113	大溝 1 V層	土師器	高坏	35	18.2				良	灰白色	密	反転
114	大溝 1 IV-7層	土師器	高坏	25					良	灰白色	密	
115	大溝 1 IV-9層	土師器	高坏	50					良	浅黄橙色	密	
116	大溝 1 IV-9層	土師器	高坏	30			14.9		良	浅黄橙色	密	
117	大溝 1 IV-7層	土師器	高坏	35				9.2	良	橙色	密	
118	大溝 1 IV層	土師器	高坏	35				9.2	良	浅黄橙色	密	
119	大溝 1 IV層	土師器	高坏	40	10.0		13.7	9.6	良	橙色	密	反転
120	大溝 1 IV層	土師器	長頸埴	45			15.3		良	浅黄橙色	密	
121	大溝 1 V層	土師器	小型埴	60	12.2	12.5	11.5	6.1	良	明黄褐色	密	
122	大溝 1 IV層	土師器	小型鉢	35	10.4	15.0	15.4		良	浅黄橙色	密	反転
123	大溝 1 IV-7層	土師器	小型鉢	10			23.7		良	浅黄橙色	密	反転
124	大溝 1 IV-9層	土師器	甕	5	18.9				良	黒色	密	反転
125	大溝 1 IV-7層	土師器	甕	10	18.1				良	灰白色	密	
126	大溝 1 V層	土師器	壺	60			26.5	5.5	良	明褐色	密	
127	大溝 1 III-5層	土師器	甕	10			22.25		良	浅黄橙色	密	反転
128	大溝 1 IV層	土師器	甕	5			17.2		良	にぶい橙色	密	反転
129	大溝 1 IV-9層	土師器	甕	75	26.8	16.5	22.05		良	明褐色	密	
130	大溝 1 V層	土師器	甕	5					良	淡橙色	密	籠目痕
131	大溝 1 IV層	土師器	甕	5					良	にぶい橙色	密	籠目痕
132	大溝 1 IV層	土師器	甕	5			19.8		良	淡黄色	密	反転
133	大溝 1 IV-9層	土師器	甕	5		27.5	24.5		良	灰白黒色	密	反転
134	大溝 1 IV-7層	土師器	甕	5			25.6		良	黒灰白色	密	反転
135	大溝 1 IV層	土師器	甕	15		17.3	14.4		良	浅黄色	密	反転
136	大溝 1 IV-7層	土師器	鍋?	15			14.5		良	灰白色	密	
137	大溝 1 IV層	土師器	鍋	5			34.0		良	淡橙色	密	反転
138	大溝 1 IV-9層	土師器	甌	10		28.0			良	浅黄橙色	密	反転
139	大溝 1 III-5層	土師器	甌	15			9.35		良	浅黄橙色	密	反転
140	大溝 1 IV-7層	土師器	甌	20				5.5	良	浅黄橙色	密	
141	大溝 1 V層	弥生土器	甕	5			25.7		良	淡黄橙色	密	菊川式(新)
142	大溝 1 I層	須恵器	壺の蓋?	5					良	灰白色	密	湖西産

土製品観察表

遺物 番号	出土場所	種別	残存率 %	長さ cm	幅 cm	焼成	色調	胎土	その他
143	大溝 1 IV-10層	手捏	95	4.5	4.55	良	黒褐色	密	甕形
144	大溝 1 IV-7層	紡錘車	55	2.3	上幅3.6 下幅3.8	良好	暗灰色	密	陶製

石製品観察表

遺物 番号	出土場所	種別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	色調	石材	その他
145	大溝 1 IV層	砥石	8.2	3.2	2.2	灰褐色	凝灰岩	4面使用
146	大溝 1 IV層	砥石	7.0	5.4	3.3	灰白黒色	凝灰岩	4面使用

(6)獣骨 大溝1に貝層が発見され、その中から15点の獣骨（歯を含む）が出土した。その詳細は一覧表に譲り、国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏による所見を記す。「1. 骨の残り方が非常に良い。2. シカが多い。その他にイノシシ類（イノシシあるいはブタ、恐らくイノシシであろう）とガンが見られた。3. スパイラル剥片が多い。骨が生のに割られたことを示しており、縄紋的、骨髄利用のためか。4.イノシシ下顎骨♂犬歯（No.8）のみ加工品。スクレイパーのように利用されたものか。縄紋には見られない利用の仕方である。」貝層の年代は大溝1が機能していた6世紀中葉と考えられ、これらの獣骨は当時の食生活の一端を伺う貴重な資料といえるだろう。

(7)貝 貝層は幅1m以上、厚み40cmの堆積で、約3mにわたって確認した。このうち土嚢袋一袋分を無作為に採取し、その種類を検討した。内訳は9割までがヤマトシジミで、残りはハマグリが主体を占め、後の種類は数点ずつである。

図版28に基づき貝の種類を紹介すると、1. サルボウ、2・4. ハイガイ、3. ヤマトシジミ、5. コタマガイ、6. ハマグリ、7. マガキ、8. ウミニナ、9. ダンベイキサゴとなる。

当時、海水面が低下し、北野遺跡に隣接する潟湖（ラグーン）が干上がって陸化の範囲が広がったと考えられており、これらの貝の種類から水域の塩分が少し濃くなったこと、また、ハイガイによって水温がやや高まったことが暗示されるという（現在、ハイガイは三河湾以西に住む）。

No.	種類	部位等	年齢	備考
1	シカ?	頸椎	成獣	カモシカの可能性があるが恐らくシカで良い
2	ウマorウシ	骨片		恐らく寛骨
3	イノシシ?	肋骨		
4	シカorイノシシ	肋骨片		未加工
5	シカorイノシシ	肋骨片		未加工
6	ガン類	上腕骨右側近位部		スパイラル剥片*1 未加工 大型のヒシクイ?のガン類
7	イノシシ類	下顎骨左側	幼獣	第3乳臼歯のみあり この下は、第3前臼歯未出歯あり
8	イノシシ類(イノシシorブタ)	♂左下犬歯		使用痕あり 上面(上端)が研磨されているので、何らかに利用された可能性が大きい
9	シカ	脛骨右側遠位関節部のみ	若獣	イヌ?の噛み痕あり ヒト?の切断痕もあり
10	シカ	脛骨近位部	成獣	未加工スパイラル剥片 解体痕あり 鉄器?の傷あり
11	シカ	脛骨左側遠位部	成獣	未加工スパイラル剥片 解体痕?あり
12	イノシシ類(イノシシorブタ)	上腕骨右側遠位部	成獣	スパイラル剥片
13	シカ	脛骨左側遠位部	成獣	スパイラル剥片
14	シカ	とう骨左側遠位部	成獣	スパイラル剥片 後面にネズミ?の噛み痕あり
15	シカ	寛骨右側座骨部分	成獣	

*1 スパイラル剥片とは、骨が生のに人為的に割られたことを示している。割れが螺旋状を呈することから判断される。

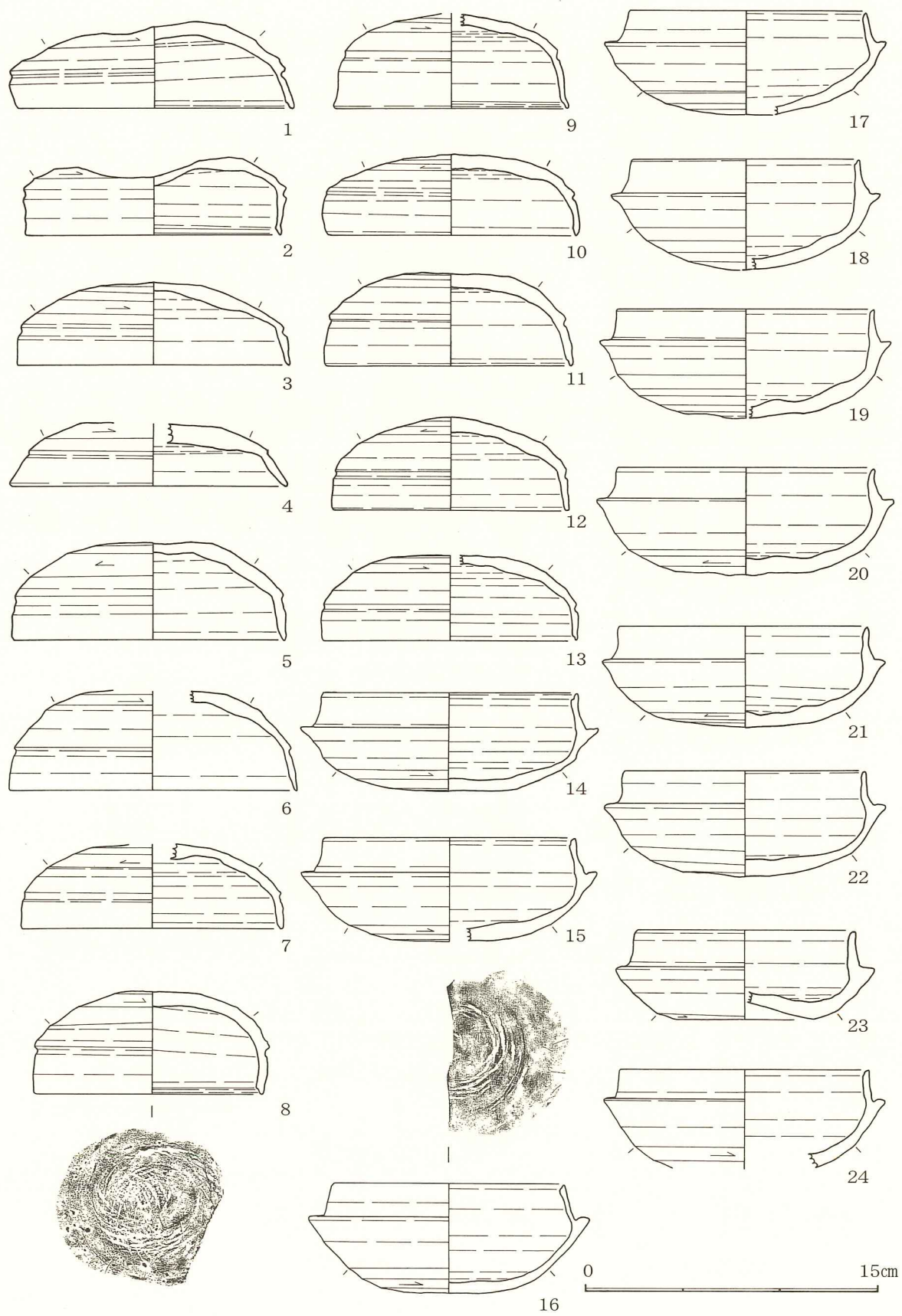


图14 北野遺跡出土遺物 1

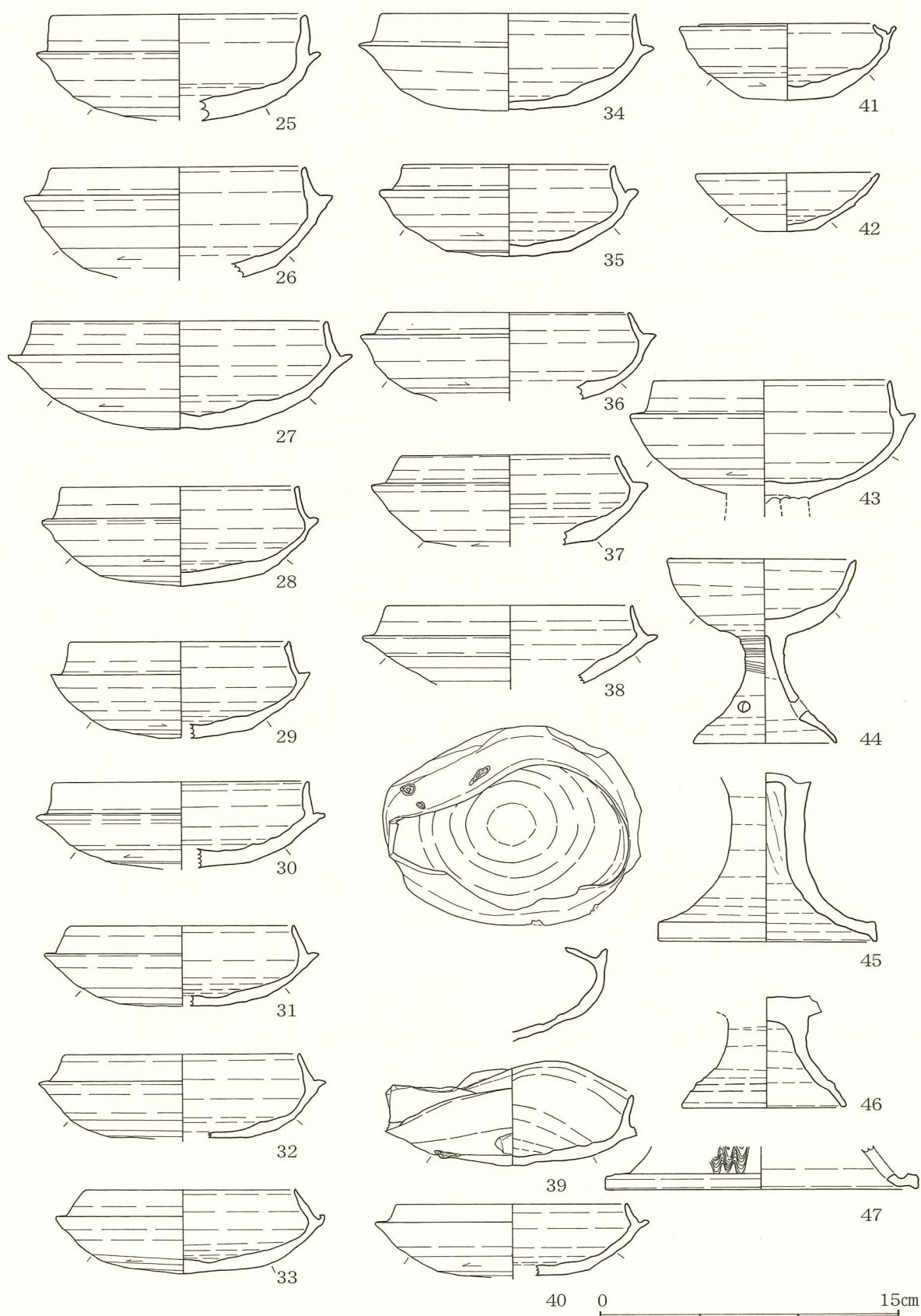
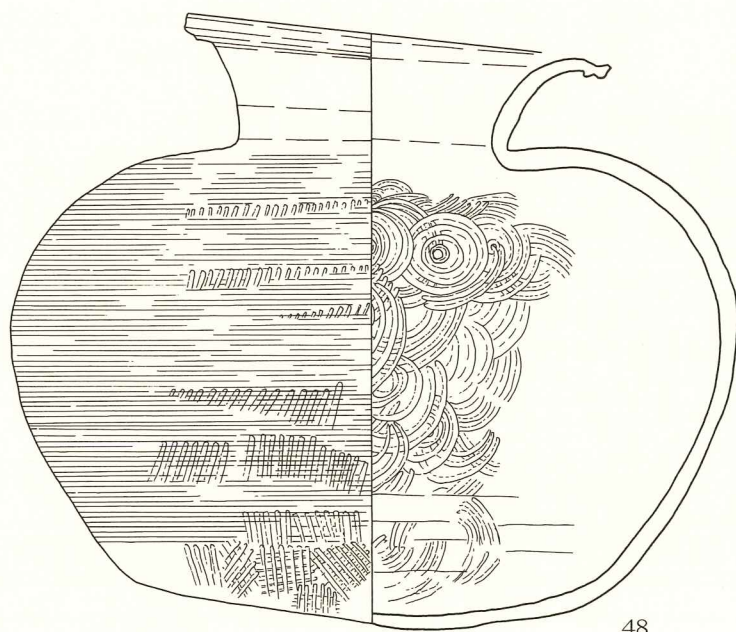
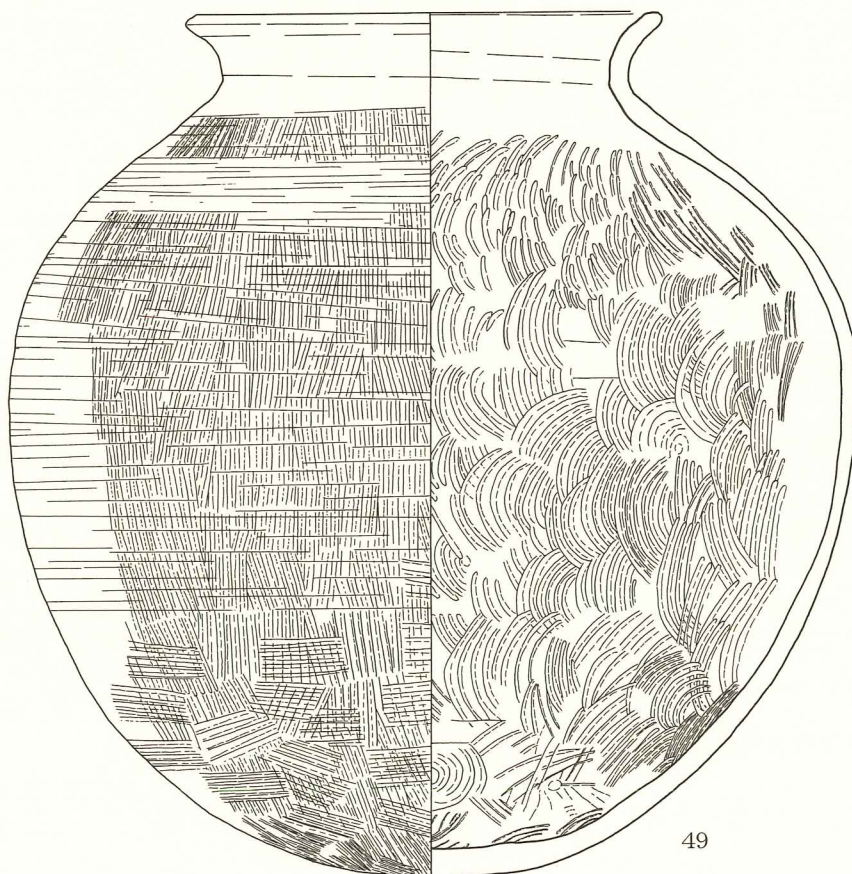


図15 北野遺跡出土遺物 2



48



49

0 15cm

图16 北野遺跡出土遺物 3

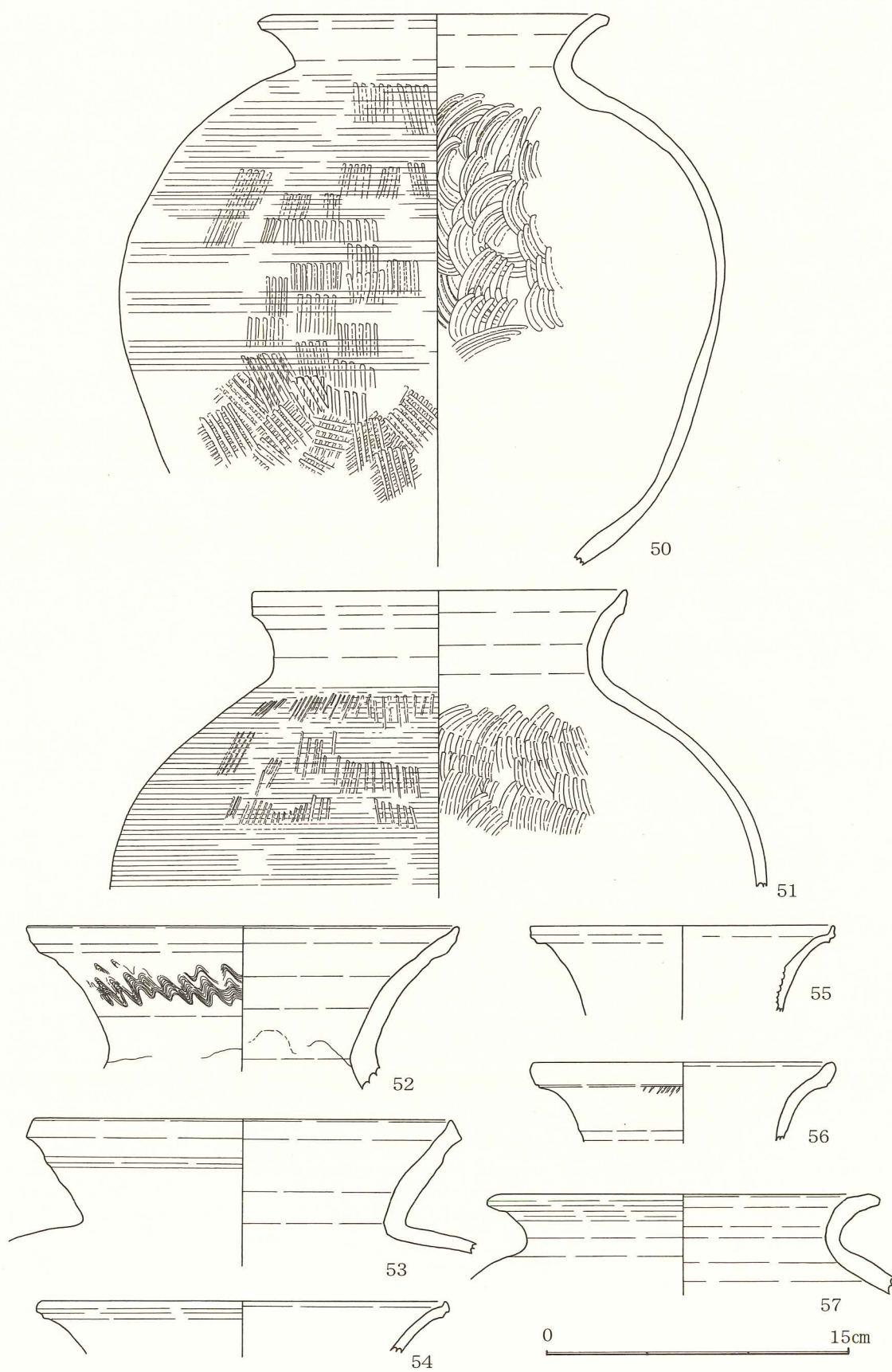


図17 北野遺跡出土遺物 4

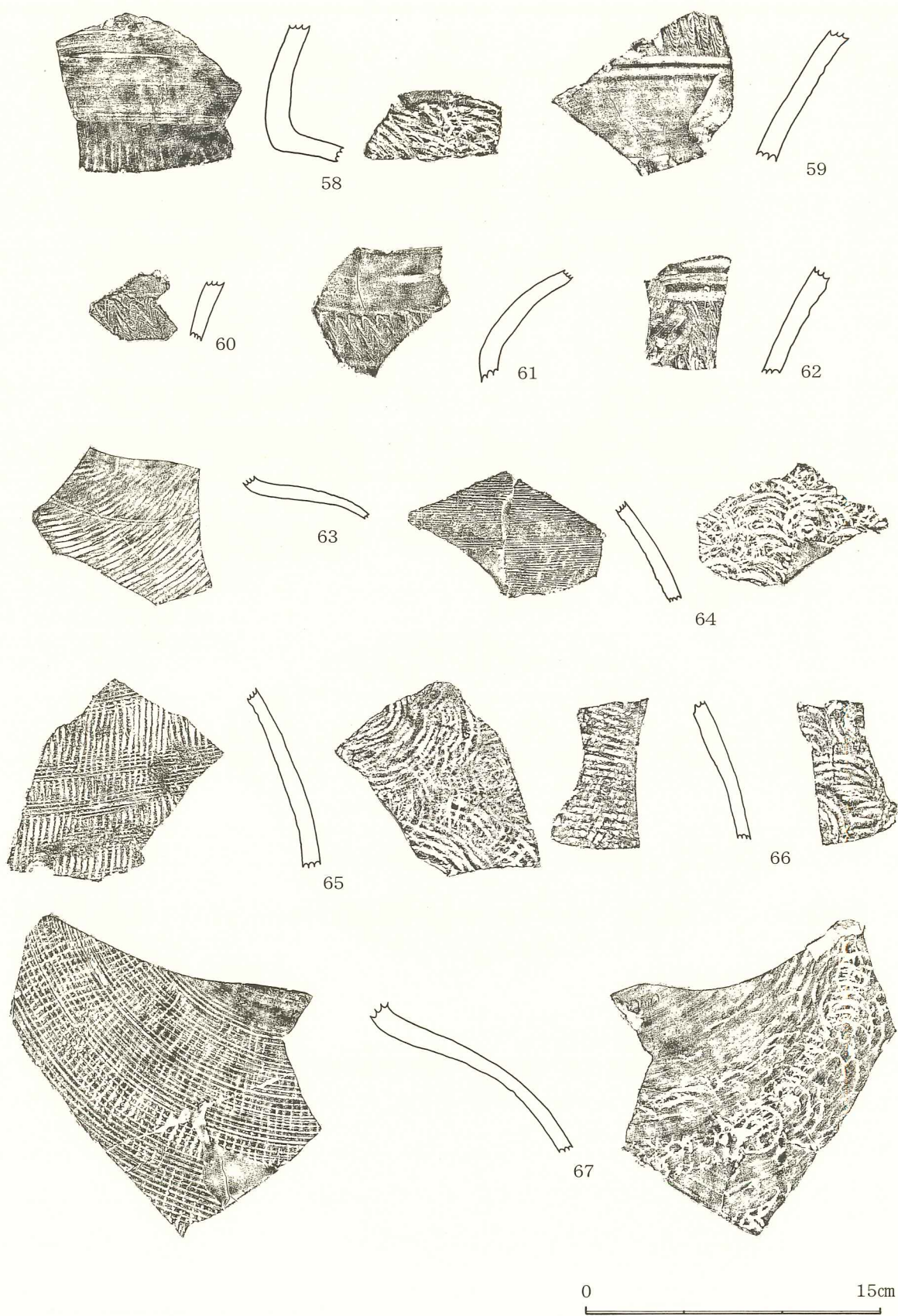


图18 北野遺跡出土遺物 5

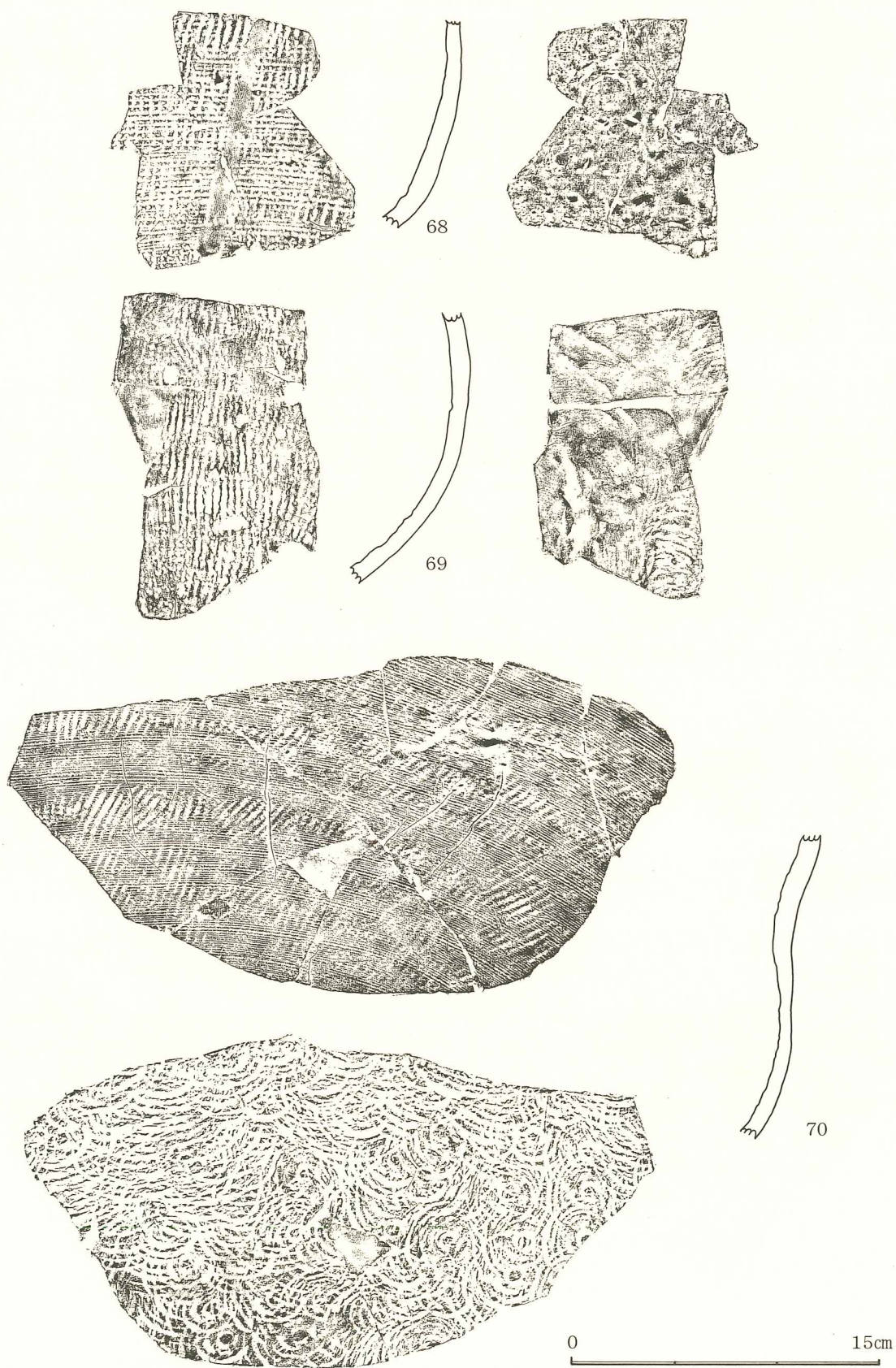


图19 北野遺跡出土遺物 6

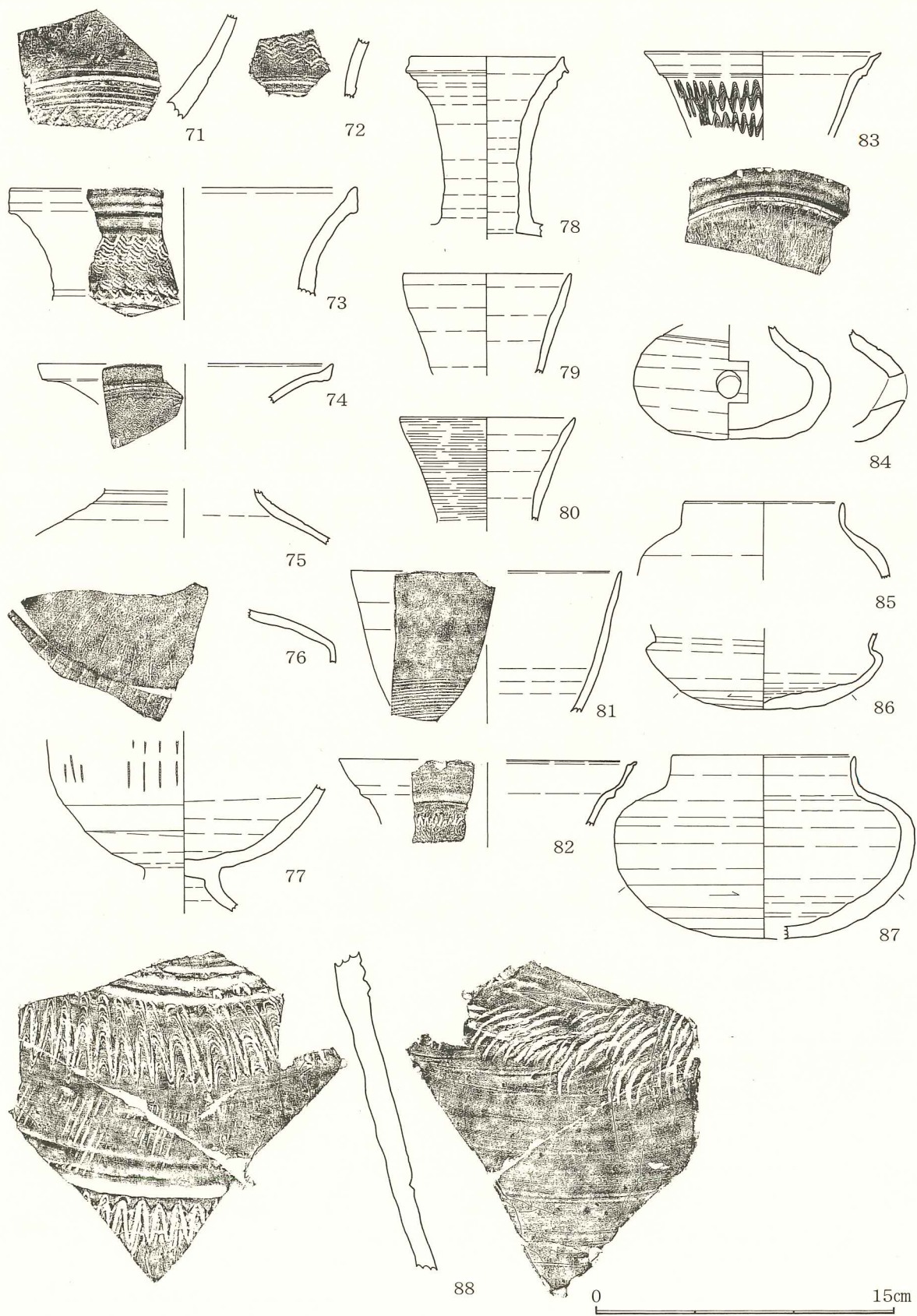


図20 北野遺跡出土遺物 7

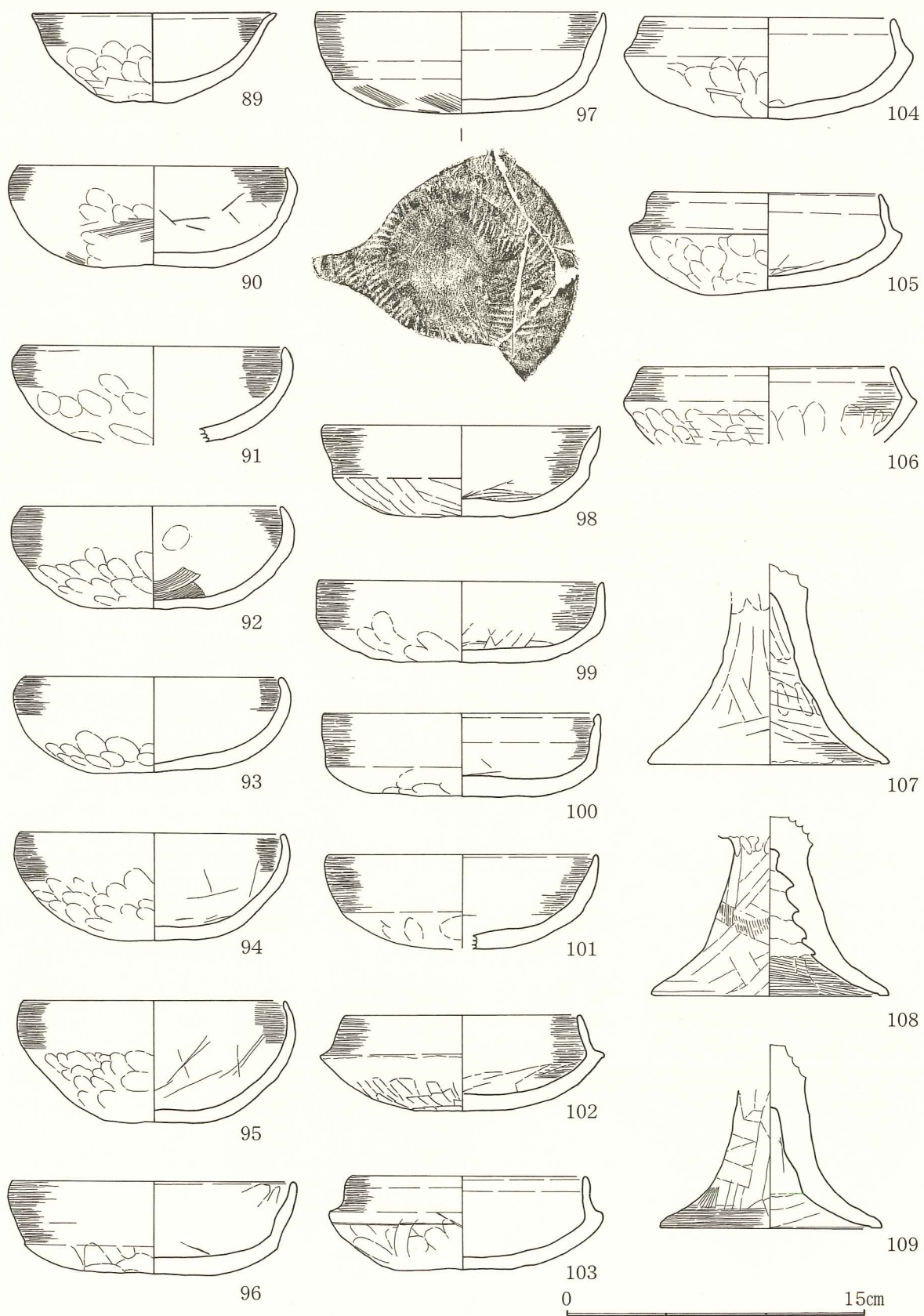


图21 北野遺跡出土遺物 8

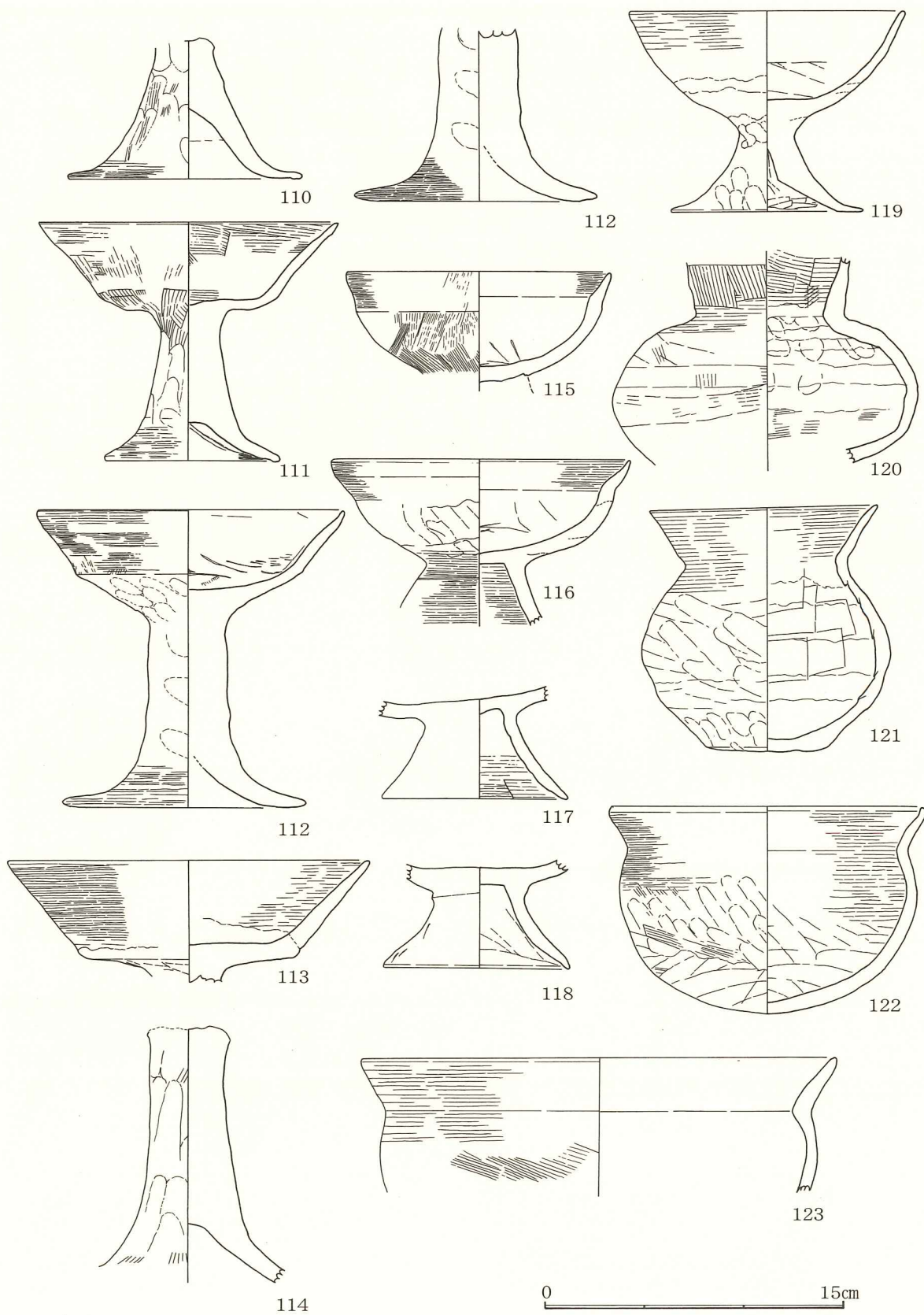


图22 北野遺跡出土遺物 9

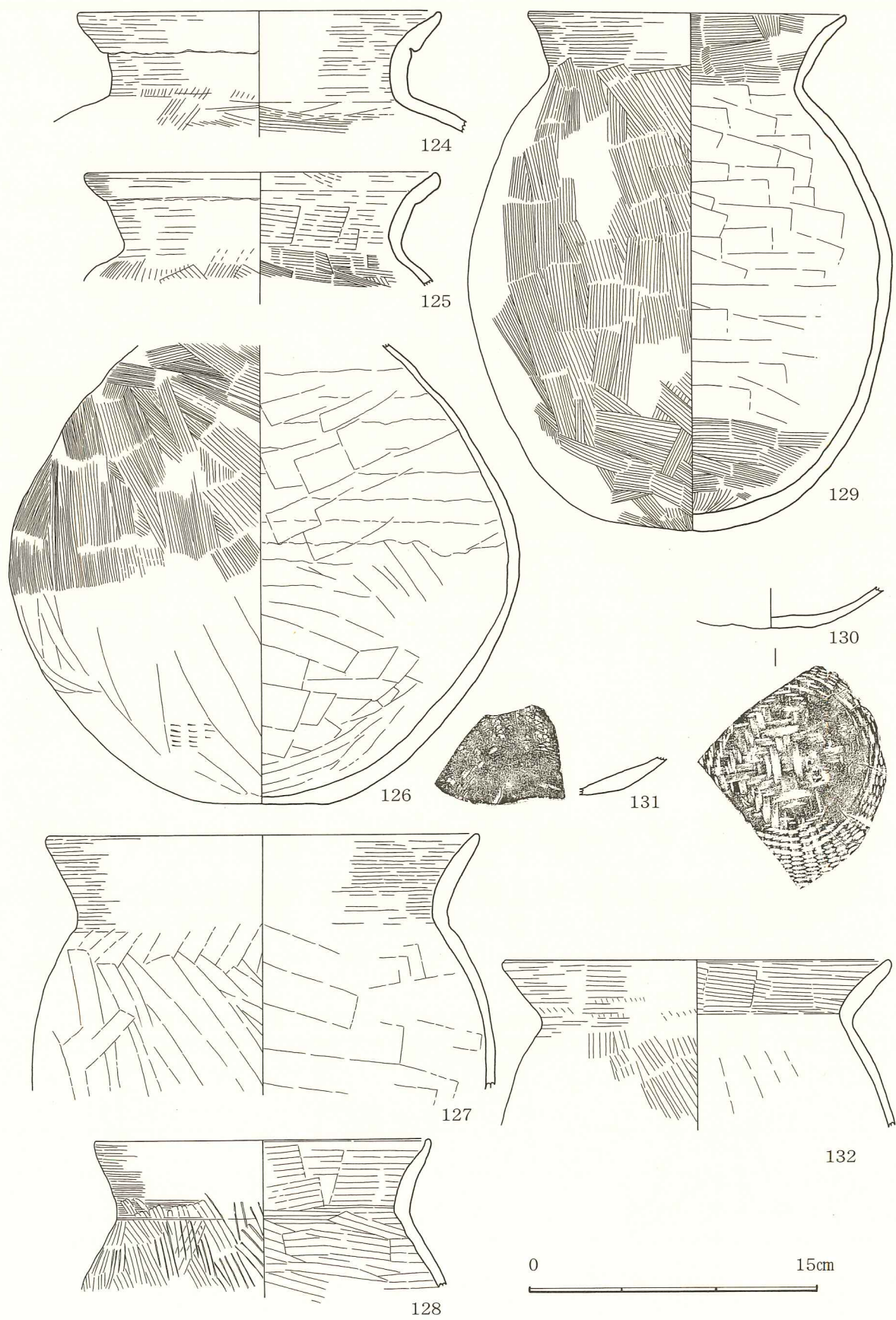


図23 北野遺跡出土遺物 10

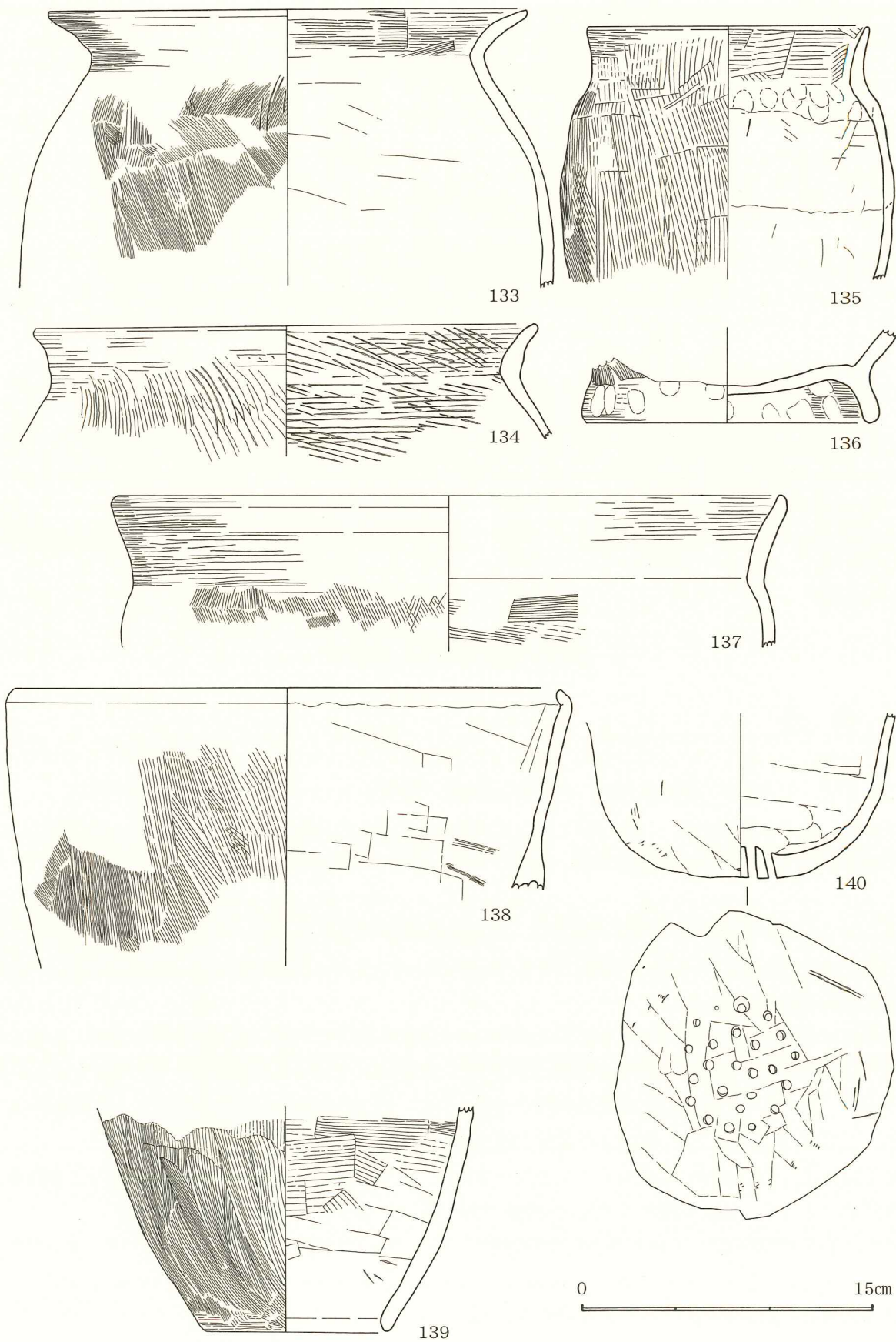


图24 北野遺跡出土遺物 11

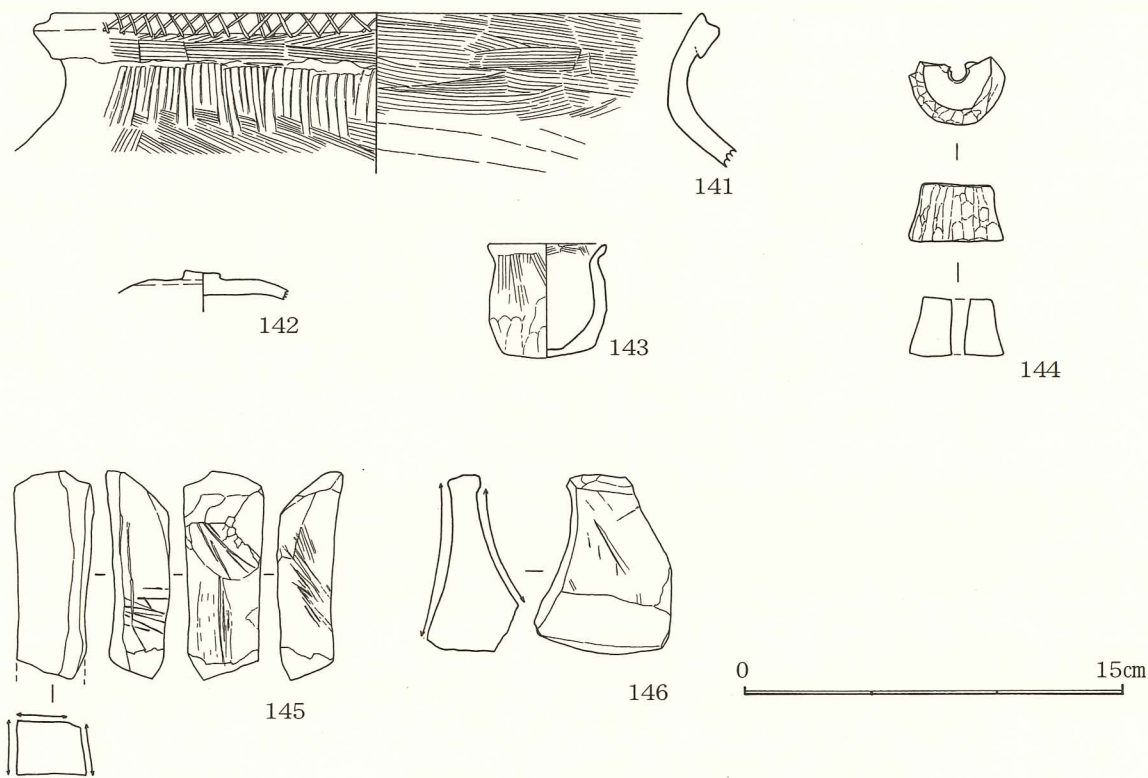


図25 北野遺跡出土遺物 12

4 総括

これまで、北野遺跡の発掘調査による成果を概観してきた。ここで総括して纏めにかえたい。北野遺跡をめぐる問題点は、(1)潟湖に面した低地の地形変化及び利用状況、(2)大溝1の機能年代、(3)遺跡の性格という3点に絞られる。では、それぞれについて検討してみよう。

潟湖に面した低地の地形変化及び利用状況 試掘確認調査の部分で記述したように、当初の目的は18世紀初頭まで残存した潟湖の痕跡が確認できないかということと、潟湖に面した低地の地形変化、及び遺跡の有無の確認であった。

調査前は、人々の生活痕跡は北野遺跡の南200mの地点に所在する宮前遺跡がその北限で、それより北は水域が広がっており、中世から近世にかけて徐々に縮小していくものと理解していた。しかし、調査の結果、6世紀中葉には生活の痕跡が認められるほど、安定した陸地となっていたことが明らかとなった。この問題に関しては、大溝1の状況が検討材料を提供してくれる。

まず第一に、溝底面の標高がマイナスを示しており、海水面の低下が生じていたことが考えられる。この現象によって、北に隣接する入江（潟湖）の縁は干上がって陸化したことが伺われる。

第二に貝層（地点貝塚）に含まれる貝の多くはヤマトシジミであるが、それ以外にハイガイ、サルボウ、ウミニナなどが含まれており、潟湖の縮小によって水域の塩分が少し濃くなったことを暗示している。これは海水面の低下を裏付けるものと考えられる。

更に浅羽低地周辺の遺跡の在り方を検討すると、5世紀代になると低地の微高地上に遺跡が殆ど無

くなり、古新田遺跡や高道遺跡に代表されるような段丘の末端という、より高乾な土地に集落が移動して行く傾向が見られる。これは、海水面の上昇に伴う地下水位の上昇と関係があるのではないだろうか。しかし、6世紀代になり再び海水面が低下すると、低地の開発が進行し、北野遺跡のような立地に遺跡が営まれるのであろう。

大溝1の機能年代 北野遺跡は大溝を中心とする遺跡である。出土した土器の全てを検討した訳ではないので細かな数字で示すことはできないが、当報告書に掲載した約150点の遺物の出土傾向と年代から大まかな傾向は指摘できるのではないだろうか。

5層に分けた溝内の土層の内、最下層のV層から出土した遺物には菊川式の弥生土器の甕片(N0,141)を上限に、5世紀後半に位置付けられる土師器の壺(N0,126)、高坏(N0,113)が含まれ、新しいものはTK10型式に平行するものが下限である。

最も多くの土器が出土したIV層(図示したうちの1/3)からは7世紀代に下る湖西産の須恵器が数点含まれるものの、8割までがTK10型式に平行するものであった。これを見ると、溝という攪拌を受け易い性格の遺構ではあるが、ほぼ6世紀中葉に機能した溝といえることができる。

そして、7世紀中葉には埋没が進み、溝としての機能を果たせなくなったものと考えられる。

遺跡の性格 北野遺跡は潟湖の縁の低地に営まれた6世紀中葉の遺跡で、これまで見つかった他の遺跡の他の遺跡と比較しても、立地条件という点において(他の遺跡は自然堤防上や砂堤上という微高地に立地している)、かなり特異な遺跡と考えられる。いくら海水面の低下があったとはいえ、一般的ではない。

しかも、大溝に沿った十数mの範囲にしか住居跡や掘立柱建物の痕跡が無く、大溝を中心に、これに沿って生活が営まれた集落といえることができる。これを考えるには、多量に出土した須恵器をどの様に理解するかにかかっている。

7世紀に下る湖西産の須恵器を除くと、出土した須恵器は衛門坂古窯産とされる鉄分を多く含み、いわゆる小豆色や暗灰色をした系統のものが主流を占めている。しかし、坏を見ると、衛門坂古窯産には余り見られない灰色や白灰色のタイプ(N0,5・7・10・14~22・27・35)も含まれており、これについては衛門坂古窯産という意見と、外部からの搬入品ではという相反する意見がある。

殆どの製品が衛門坂古窯産とすれば、流通に関わる遺跡であった可能性もある。北野遺跡は衛門坂古窯とは潟湖を挟んで南北に1.7kmの地点(図3参照)に位置し、舟運を利用した流通を考慮すると、かなり有利な場所と考えられる。しかし現時点では、衛門坂古窯を取り巻く周辺遺跡の様相が明らかになったという程度のことしか言えない。

いずれにせよ、確実なところは胎土分析を経ないと下すことはできないので、今後の課題ということになる。しかし、大溝1から出土した遺物群は、遠江における6世紀中葉の土器研究を進める上で、重要な資料を提供してくれたことに異論はないであろう。

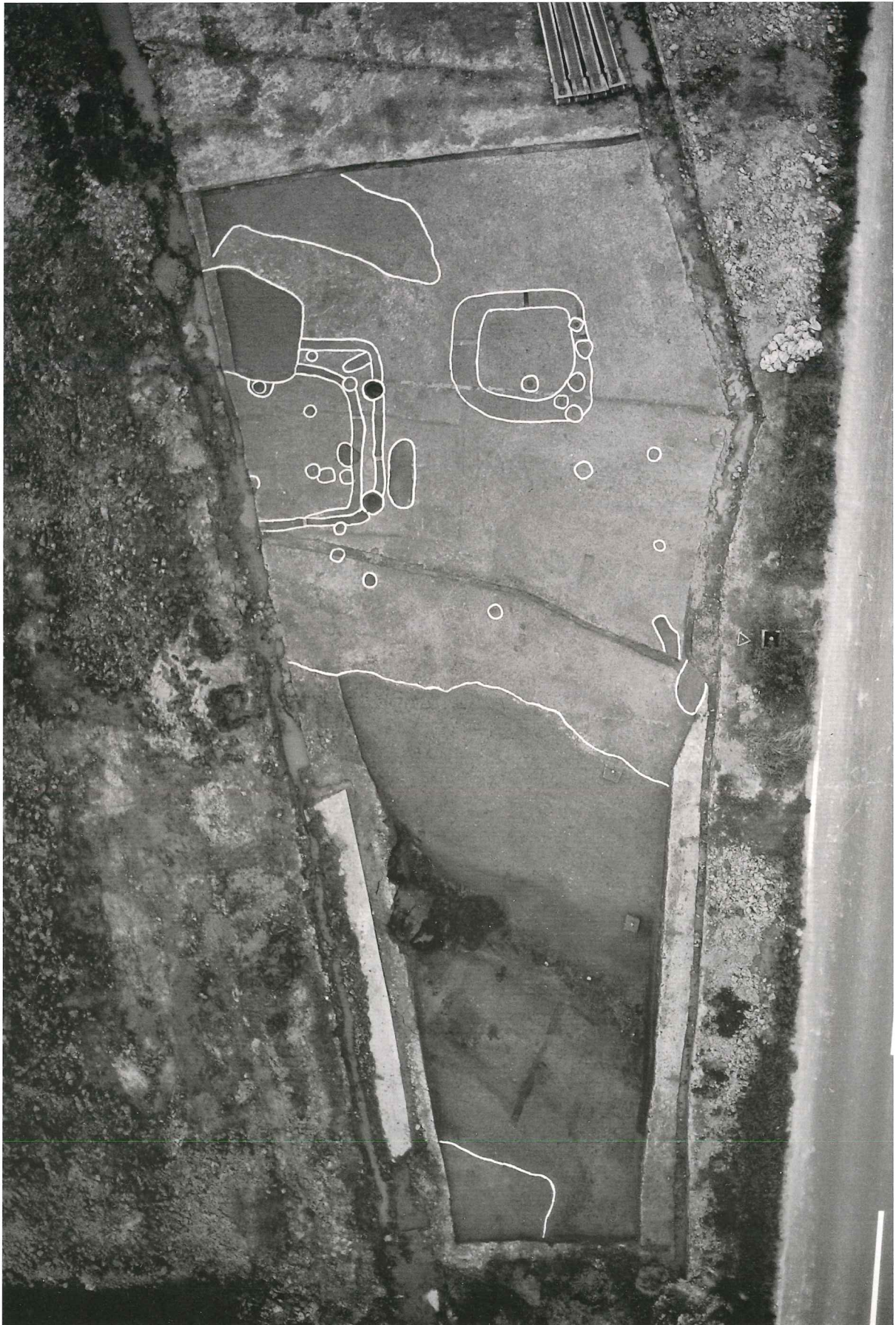
[参考文献]

湖西文化研究協議会 1966 『大沢・川尻古窯跡調査報告書』

川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『須恵器—古代陶質土器—の編年』静岡県考古学会シンポジウム2

五島康司 1985 『坂尻遺跡—序文・古墳時代編—』 袋井市教育委員会他

加藤芳朗 2000 第1編「自然環境の変遷」『浅羽町史』 浅羽町



北野遺跡完掘状況



1. 大溝1 半載状況 (西側より)



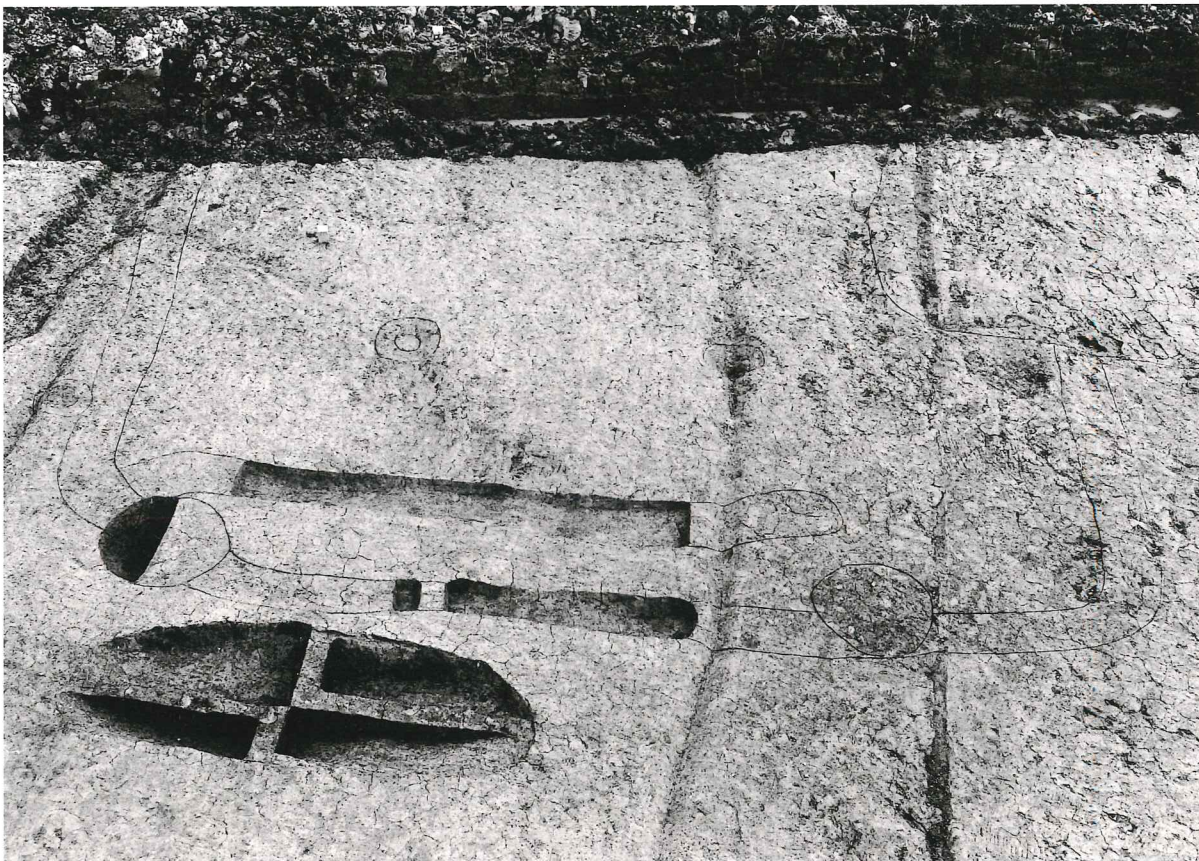
2. 大溝1内 貝殻出土状況



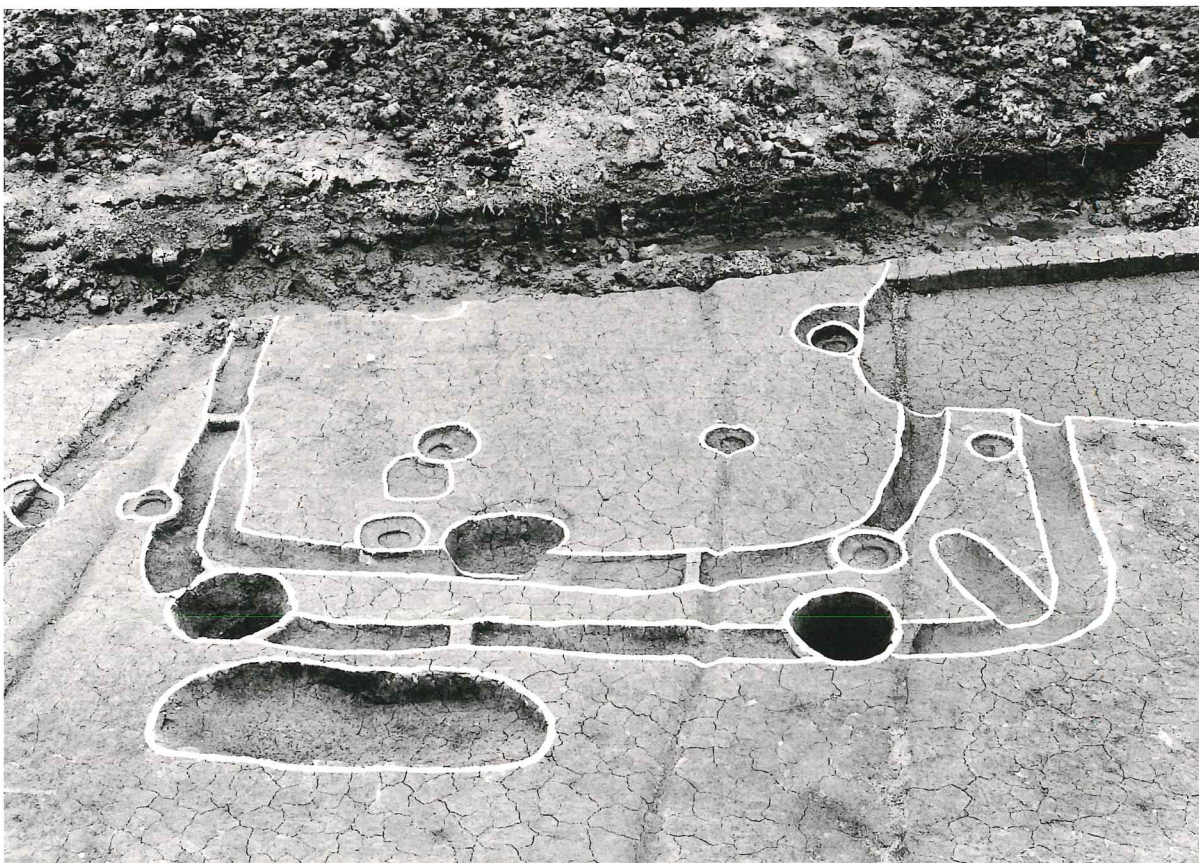
1. 大溝1内トレンチ遺物出土状況



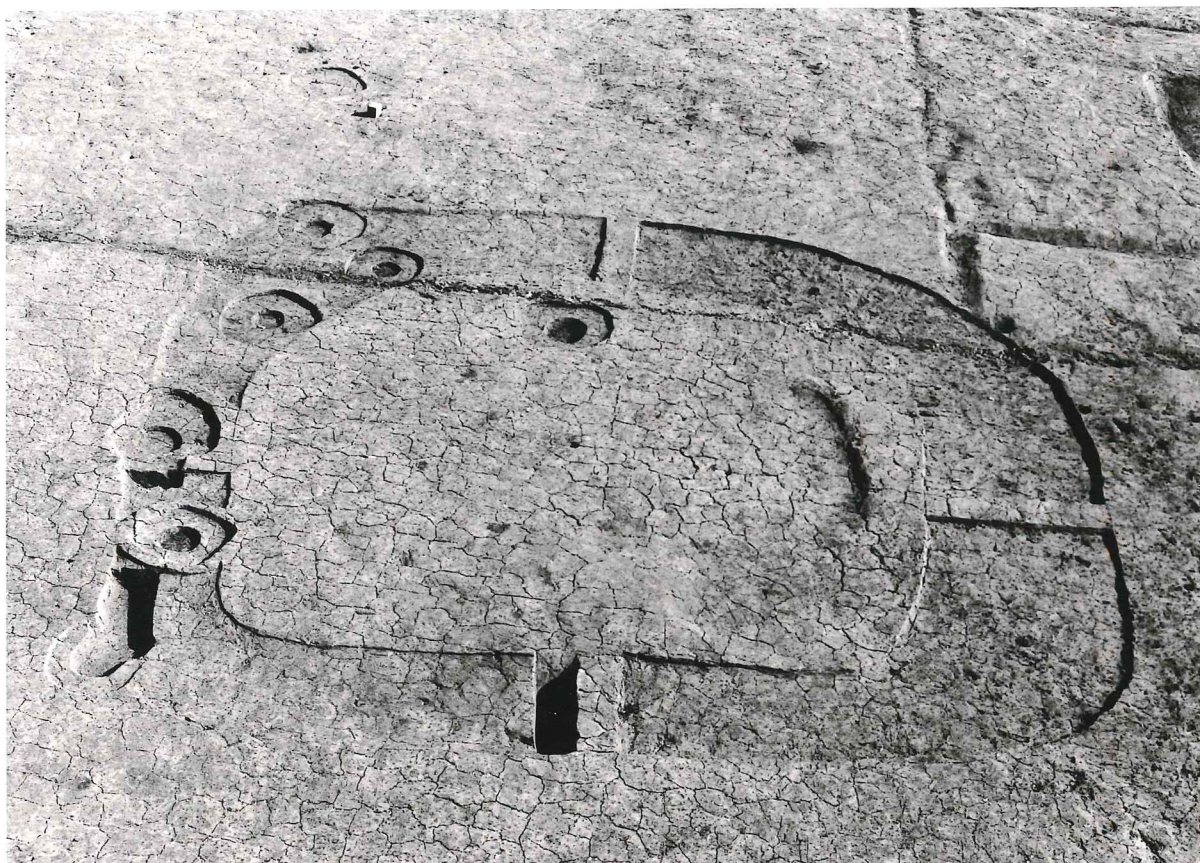
2. 大溝1Ⅲ層南岸遺物集中箇所の状況



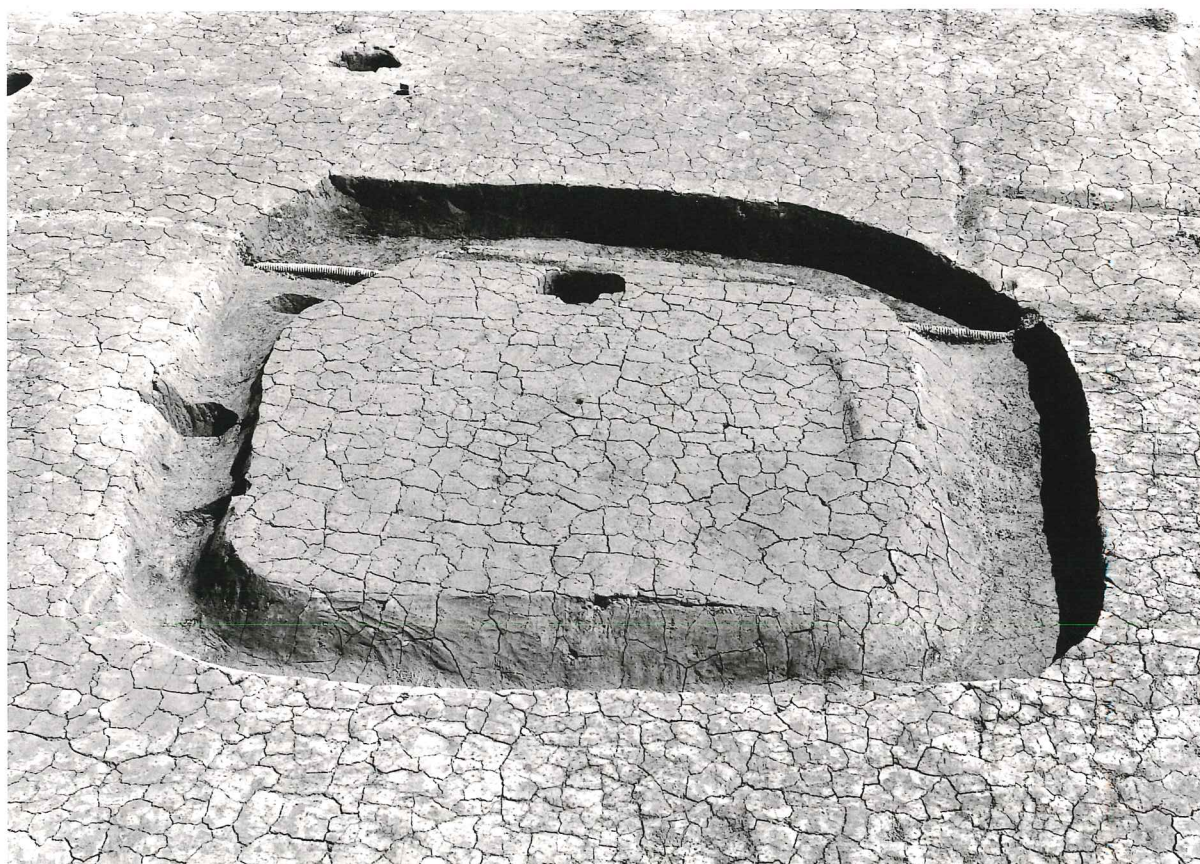
1. 住居跡 1・2 (発見状況)



2. 住居跡 1・2 (完掘状況)



1. 方形周溝遺構（発見状況）



2. 方形周溝遺構（完掘状況）



1. 焼土坑（発見状況）



2. 焼土坑（発掘状況）



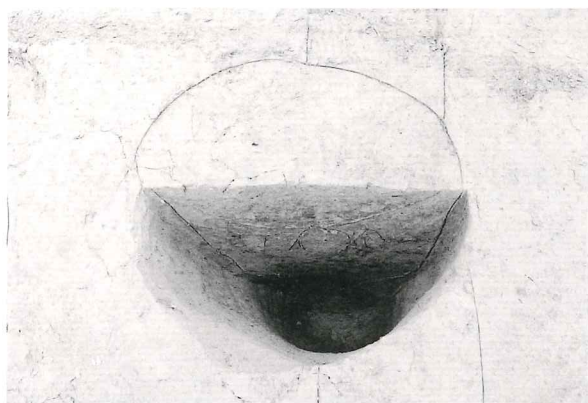
1. 大溝2トレンチ断面



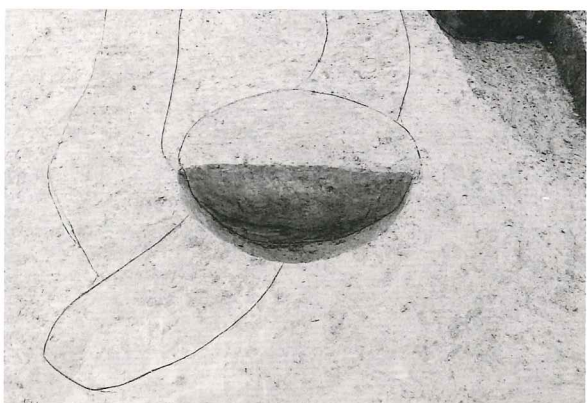
2. 北野遺跡内 浅羽大囲堤基底部



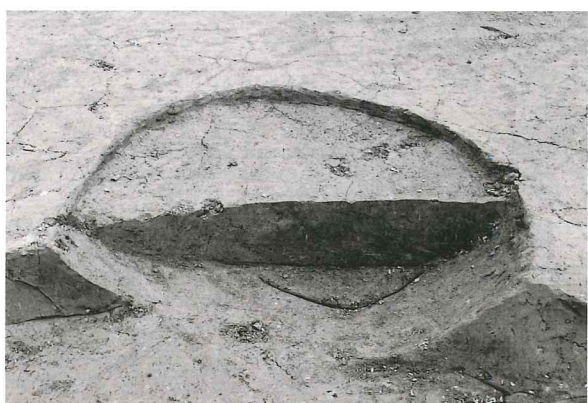
1. 方形周溝遺構 東北コーナー溝断面



2. 土坑1 半載状況



3. 土坑2 半載状況



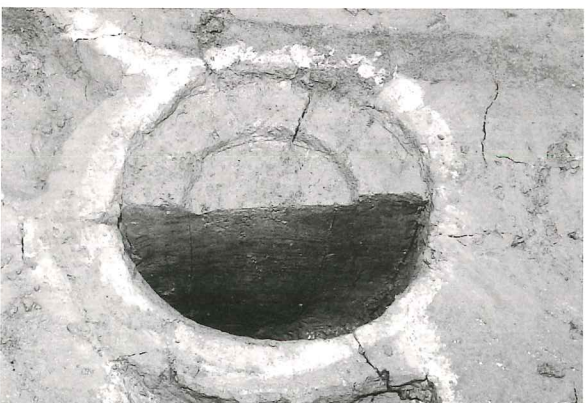
4. 土坑3 半載状況 (手前は住居跡の周溝)



5. 柱穴4 半載状況



6. 柱穴3 半載状況 (右側は住居跡の周溝)



7. 柱穴1 半載状況



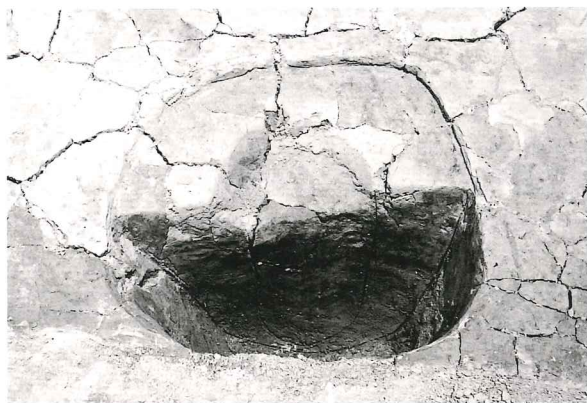
8. 柱穴2 半載状況



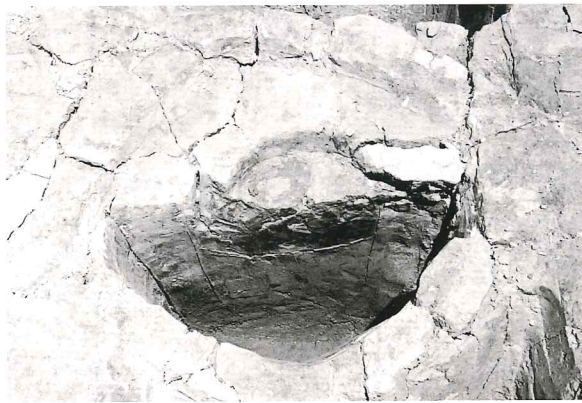
1. 柱穴5半載狀況



2. 柱穴6半載狀況



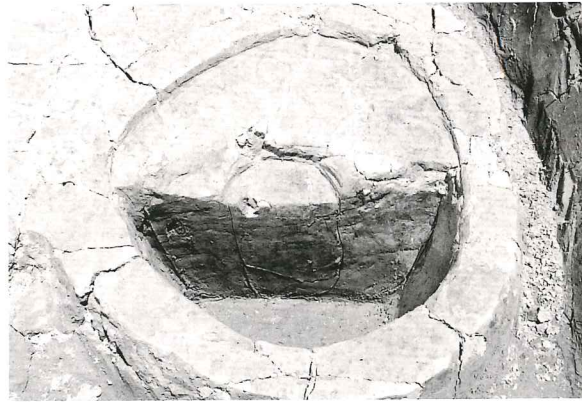
3. 柱穴12半載狀況



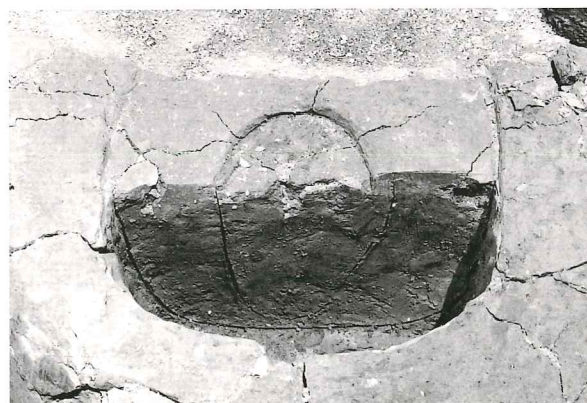
4. 柱穴13半載狀況



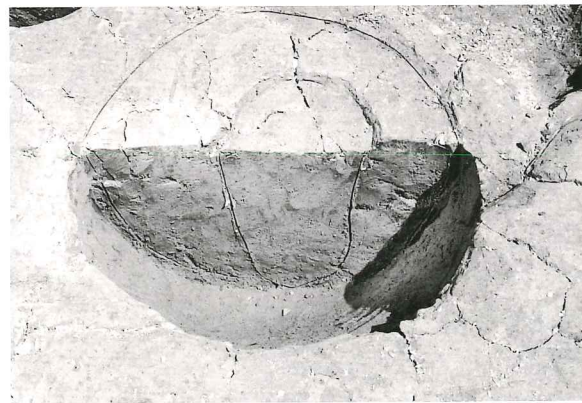
5. 柱穴14半載狀況



6. 柱穴15半載狀況



7. 柱穴16半載狀況



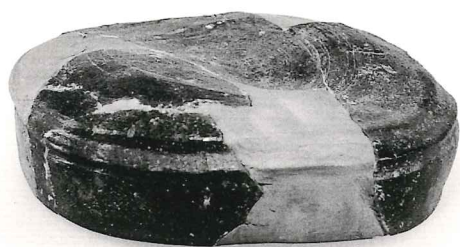
8. 柱穴17半載狀況



1. 宮前遺跡 溝状遺構遺物出土状況



2. 宮前遺跡 浅羽大囲堤基底部土層断面



1



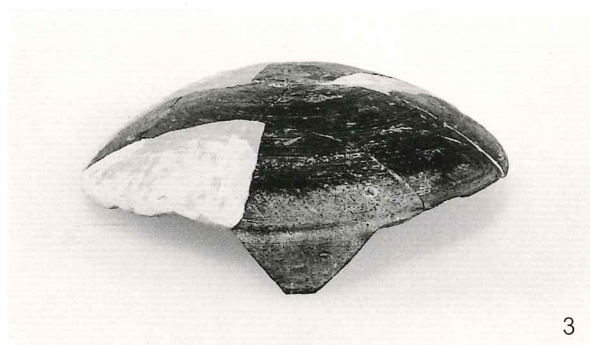
6



2



7



3



8



4



9



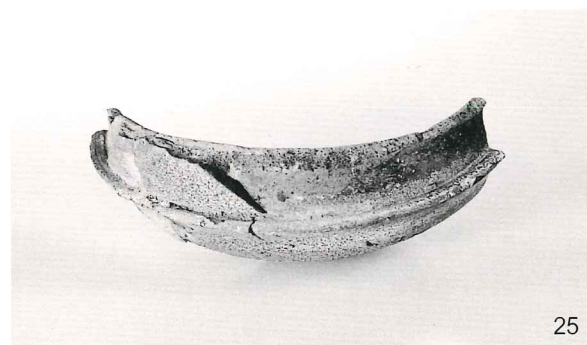
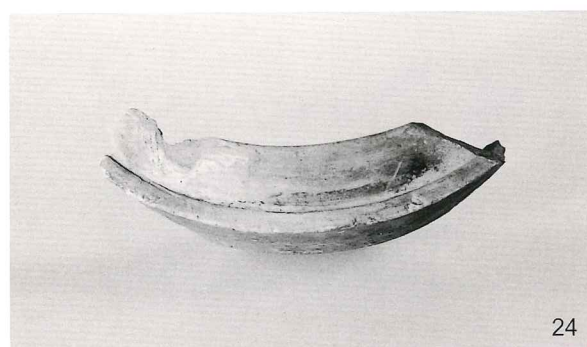
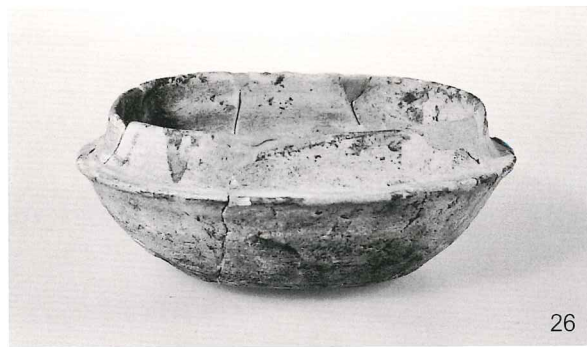
5



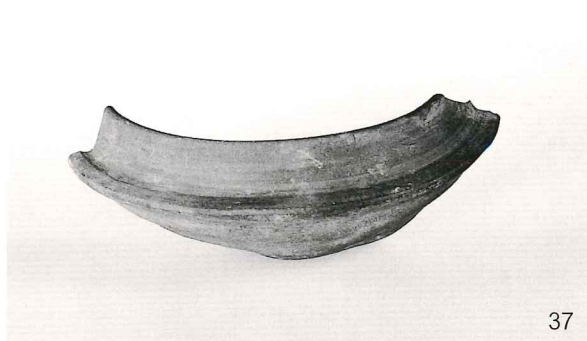
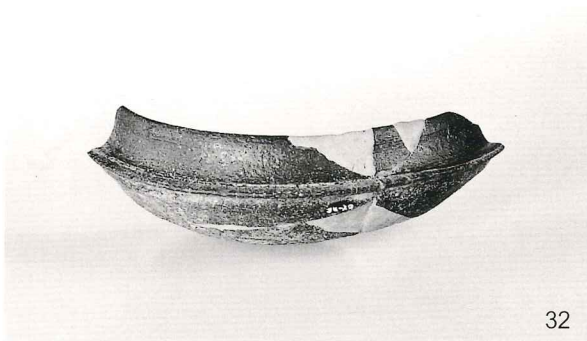
10

北野遺跡出土遺物 1





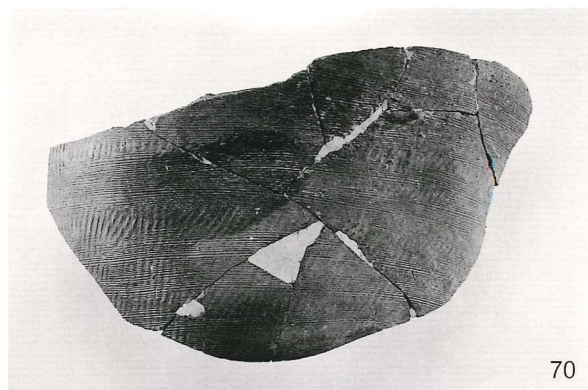
北野遺跡出土遺物 3







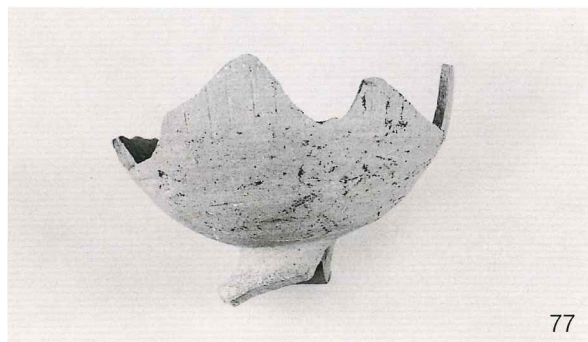
51



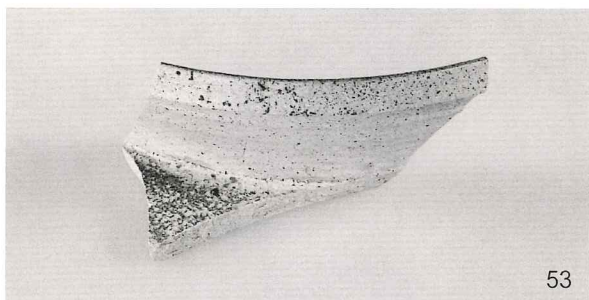
70



52



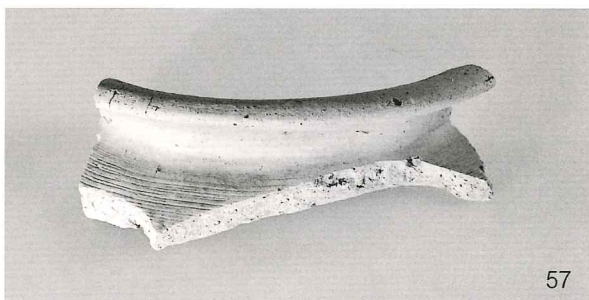
77



53



84



57



86

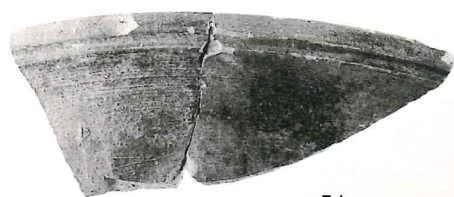


69

68



87



54



55



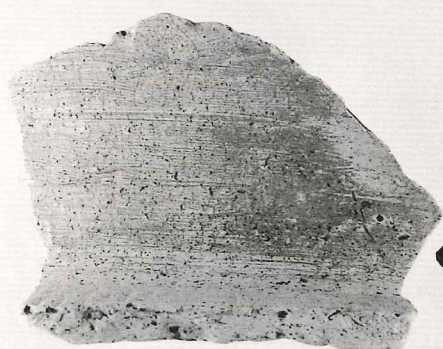
56



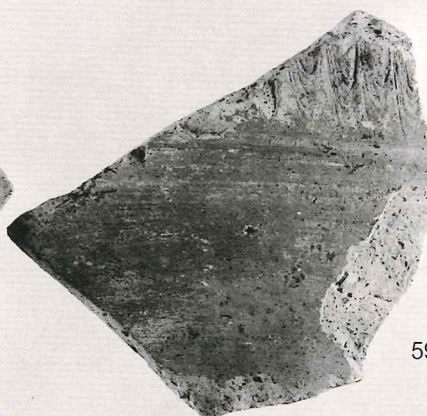
47



142



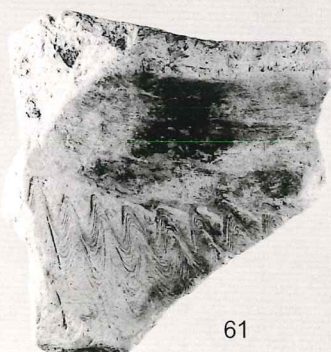
58



59



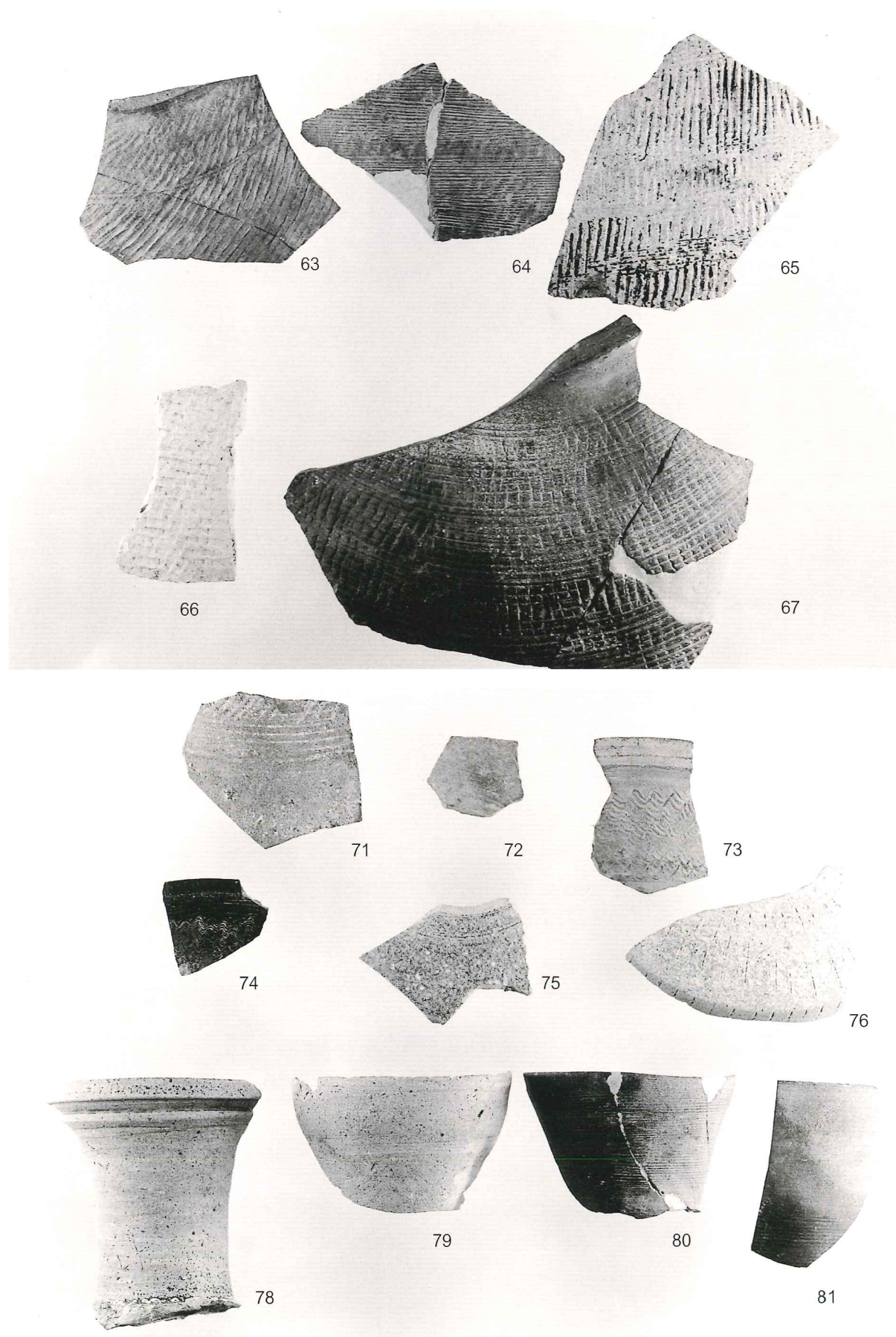
60



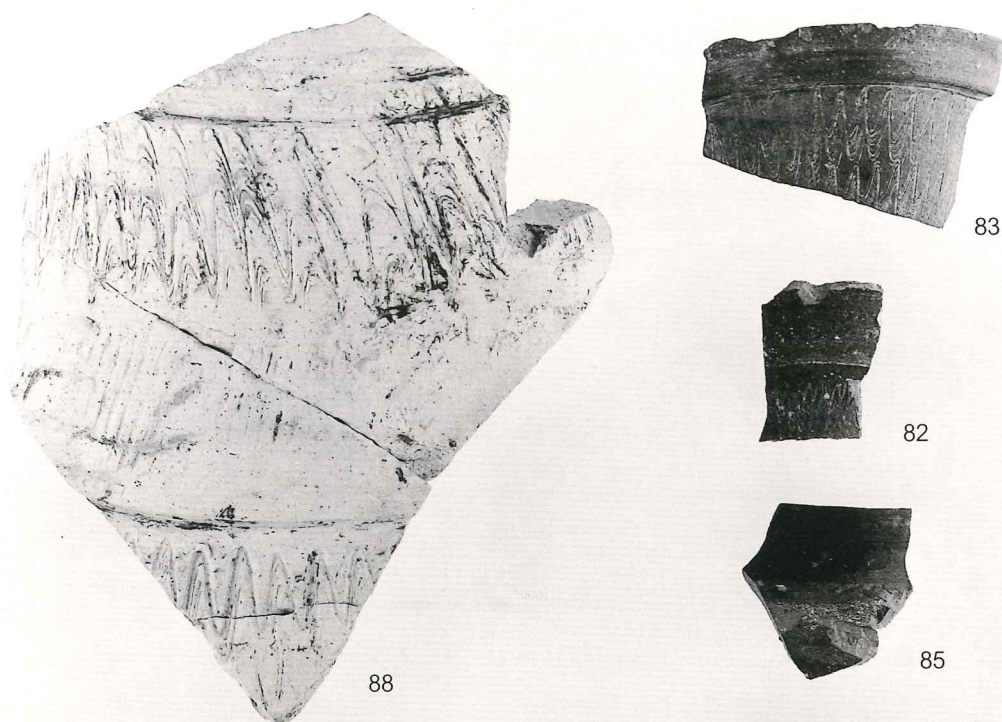
61

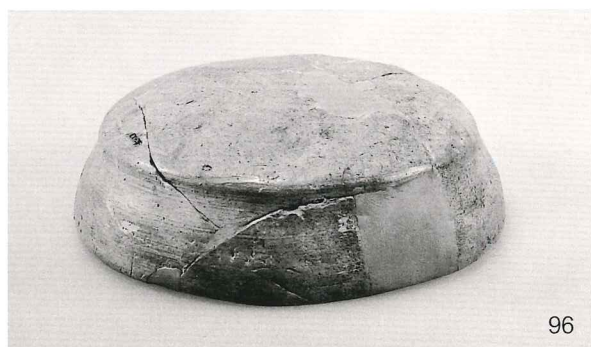
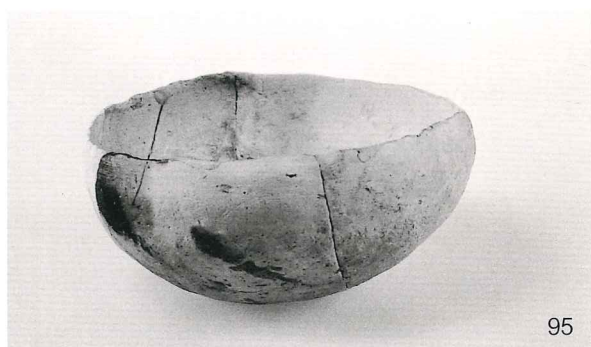


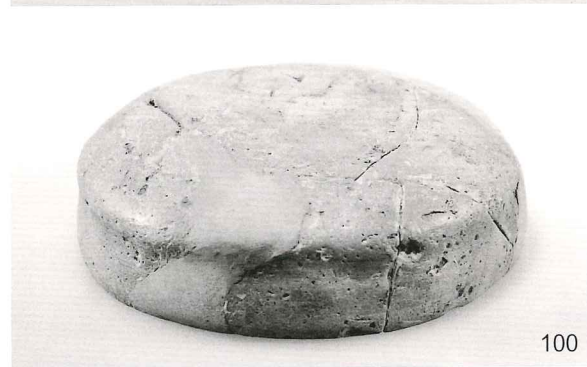
62



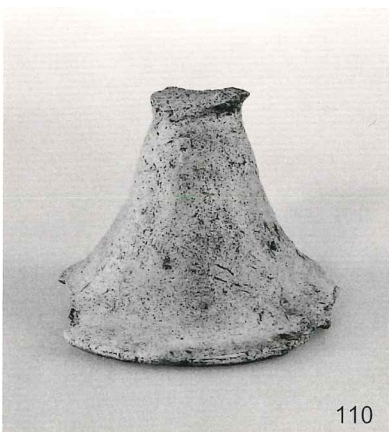
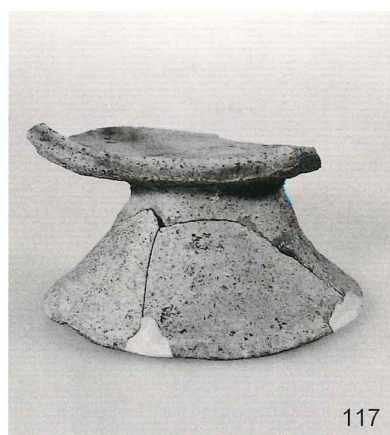
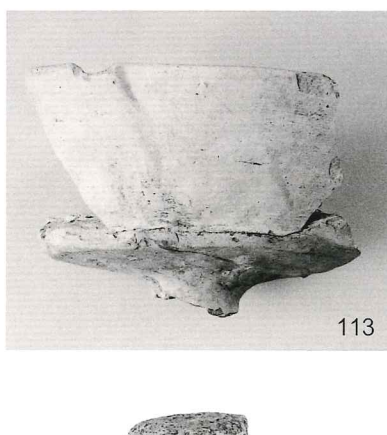
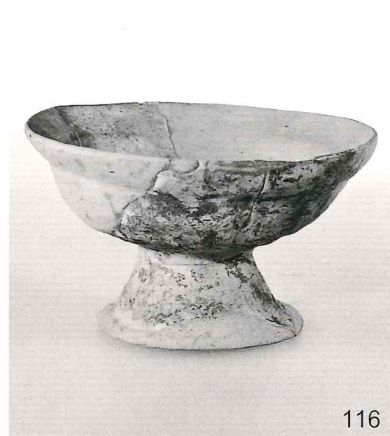
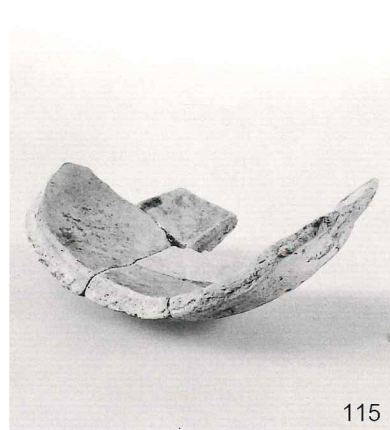
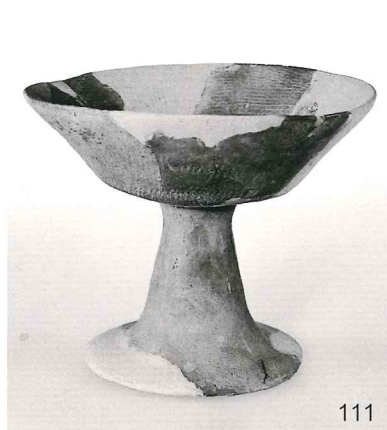
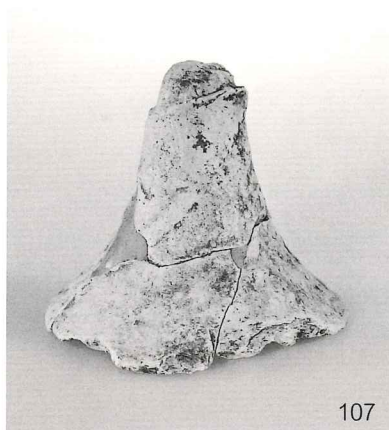
北野遺跡出土遺物 8

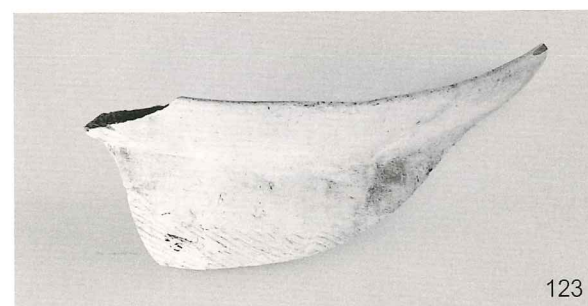




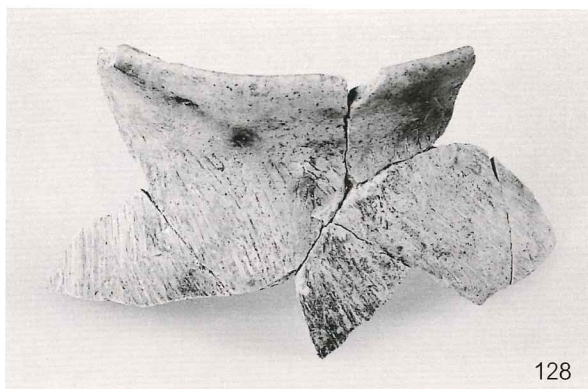


北野遺跡出土遺物11





北野遺跡出土遺物13



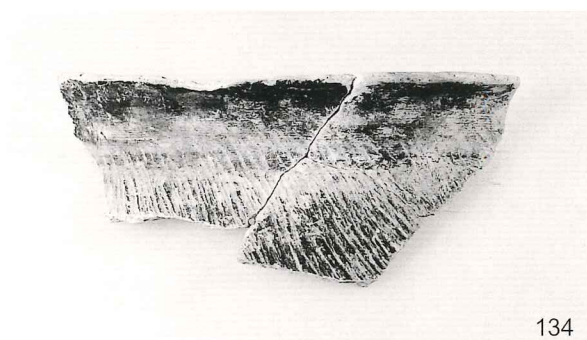
128



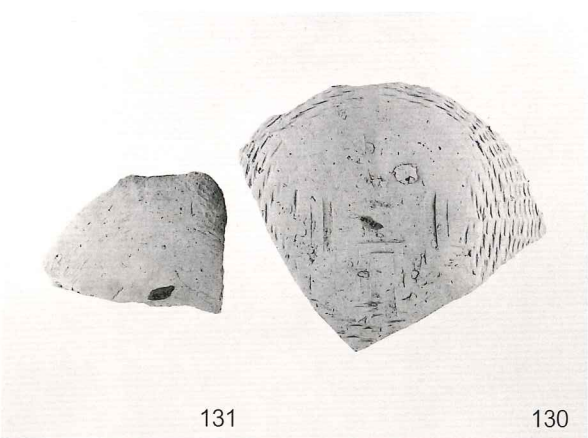
133



129



134

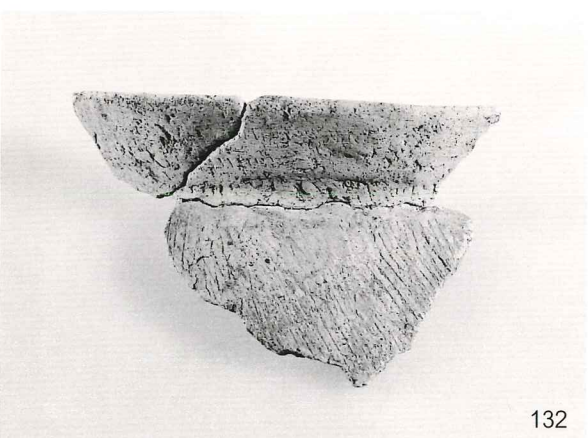


131

130



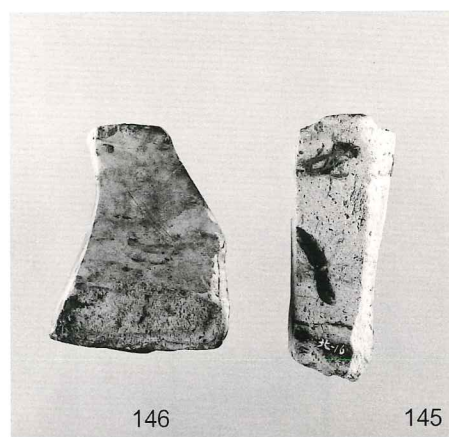
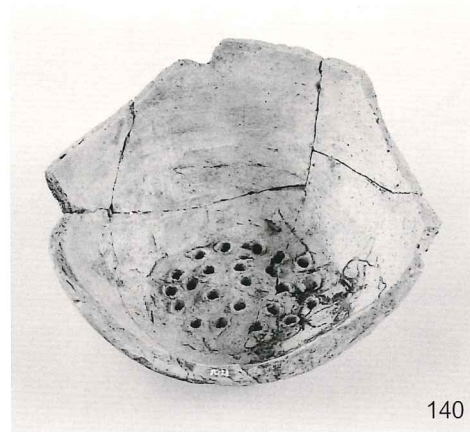
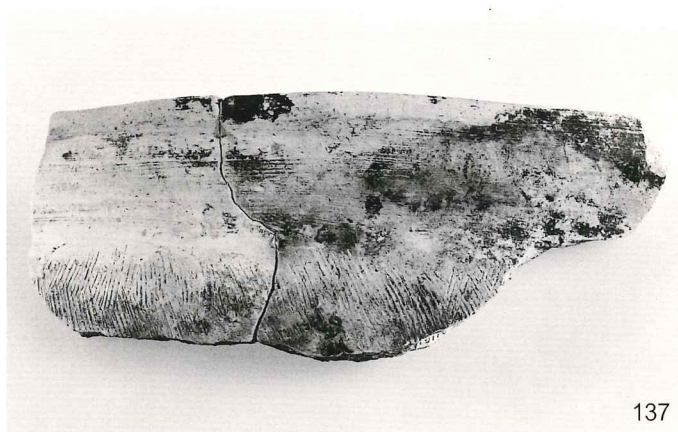
135

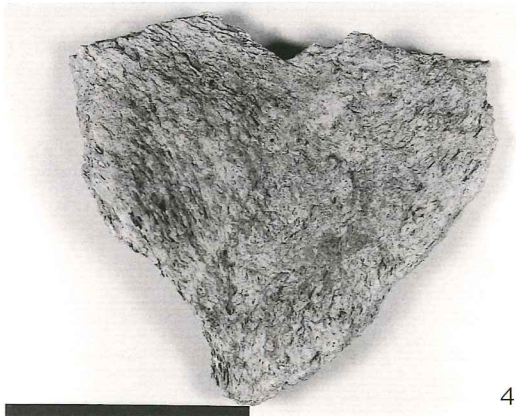
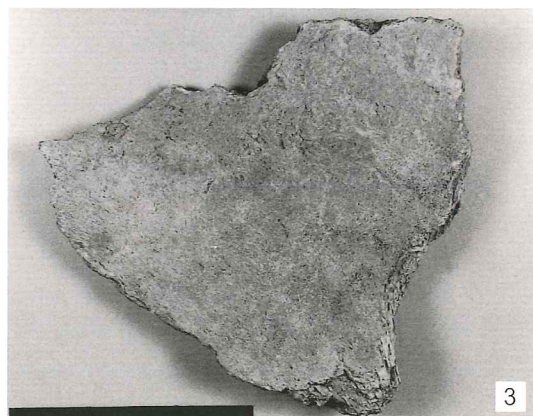
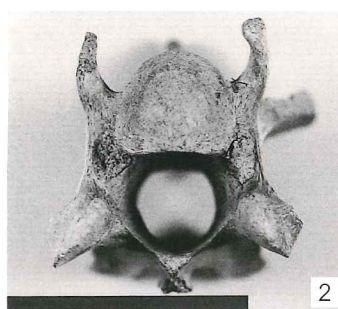
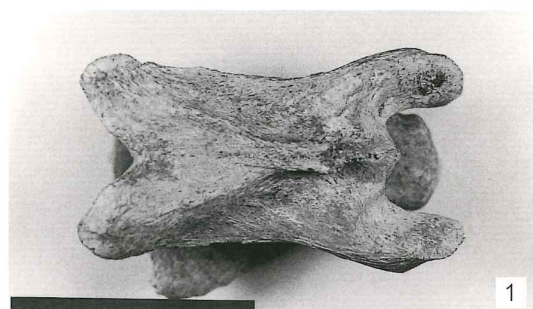


132



136

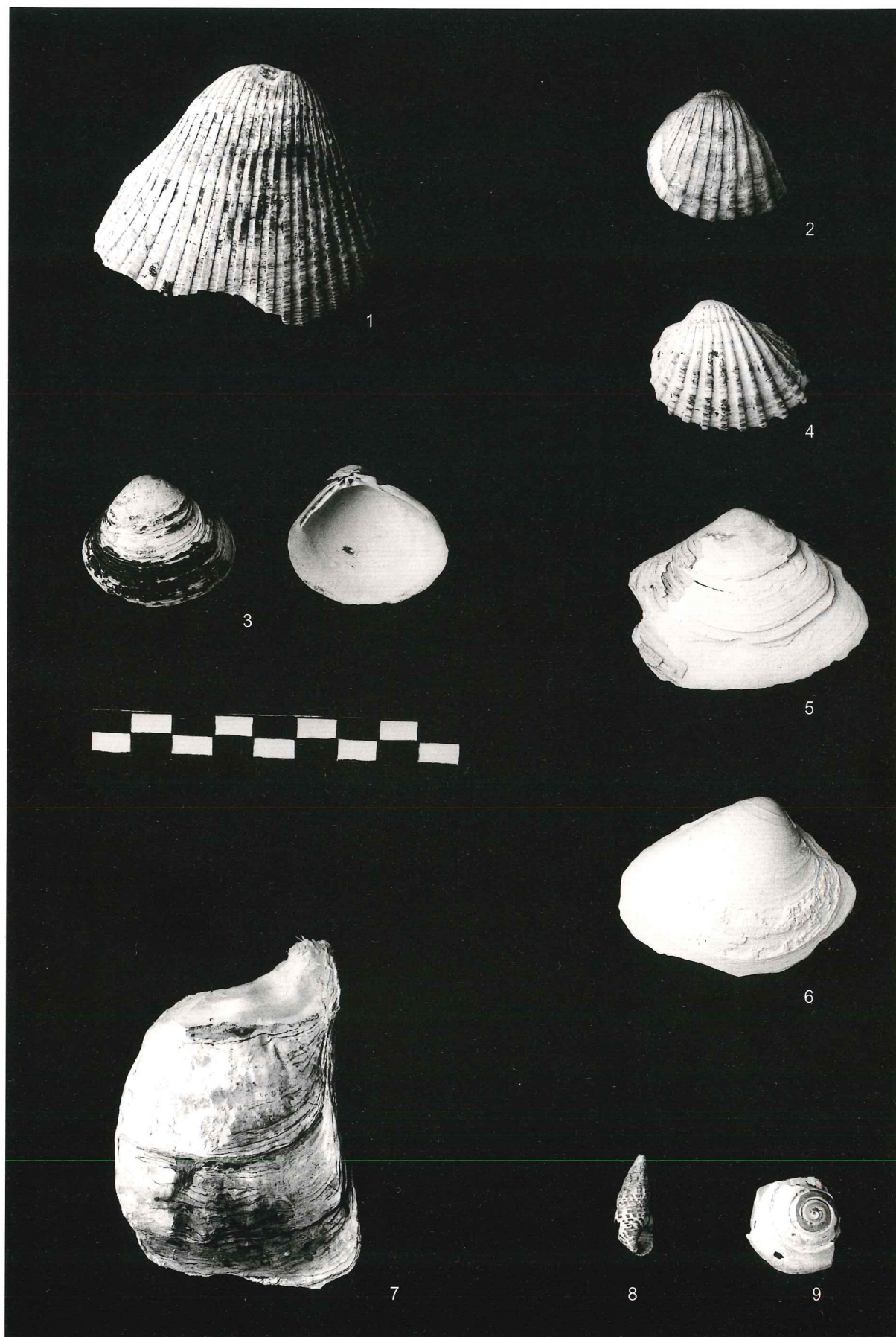




1,2 : No.1 シカ頸椎
3,4 : No.2 ウマorウシ 骨片
5,6 : No.6 ガン類 上腕骨右側近位部
7,8 : No.8 イノシシ類♂左下犬歯
9 : No.3,4,5 シカorイノシシ肋骨片



10,11 : No.10 シカ脛骨近位部
12 : No.10 鉄器の痕(矢印)
13,14,15 : No.14 シカとう骨左側遠位部
16 : No.14 ネズミ食痕(矢印)



北野遺跡出土遺物18

ふ り が な	きたのいせき・みやまえいせき							
書 名	北野遺跡・宮前遺跡							
編 著 者 名	山本義孝(編集)、木曾昌司							
編 集 機 関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発 行 機 関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発 行 年 月 日	2000年3月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
きたのいせき 北野遺跡	しずおかけん 静岡県 いわたくん 磐田郡 あさばちょう 浅羽町	22481	53	34度 41分 18秒	137度 56分 56秒	1997年 4月21日 ～ 6月30日 1996年 12月16日 ～ 12月25日	1,500㎡ 60㎡	県道設置 と歩道拡 幅
みやまえいせき 宮前遺跡			49					
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
北野遺跡	集 落	古墳時代後期		大溝 竪穴住居		須恵器 土師器 貝 獣骨	大溝からTK10型式に 平行する右衛門坂古 窯製品の須恵器。 模倣坏が出土	
	堤 防	近世		浅羽大囲堤				
宮前遺跡	集 落 堤 防	古墳時代前期 近世		溝状遺構 浅羽大囲堤				

静岡県 磐田郡 浅羽町

北野遺跡・宮前遺跡

2,000年3月15日発行

編集・発行 浅羽町教育委員会

印刷 静岡県磐田市二之宮 251

株式会社 山田印刷所

TEL(0538)35-6151
